蕾の悦虐（ロリマゾ）

近世末期アメリカ編

ジュリア～背徳の恍惚

原　案　ＷＩＬＬ様

小説化　濠門長恭

目次

自涜と反省 - 2 -
告白と贖罪 - 14 -
苦痛と恥辱 - 31 -
礼拝の試練 - 38 -
魔女の嫌疑 - 55 -
三穴の聖封 – 75 –
聖刻の儀式 – 95 –
休養と疑念 – 109 –
二匹の生贄 – 117 –
【後書き】 – 148 –

この小説はフィクションです。登場する人物、組織、地名、事件、年齢は架空のものであり、実在する如何なる事象とも関係はありません。

登場人物がなにがしかについて偏見を述べる場面もありますが、それは歪んだ人格を描写するための設定です。作者の意見ではありません。

自涜と反省

　神様はお眠りにはならないと思いますが、人の子は眠ります。ですから、朝のお祈りは目覚めの挨拶から始めます。聖壇の前に跪いて、声に出してきちんと唱えます。
「神様、おはようございます。安らかな眠りから満ち足りた目覚めを迎えられたことを感謝します……」
　こうやって毎朝礼拝堂でお祈りを捧げるのは私だけです。父様は牧師ですが、朝は起きてすぐにベッドから出て、その場でお祈りをしています。神様は教会にいらっしゃるのではなく、祈りを捧げる者のそばに、あるいは信者が集まっている場所に降臨されるのです。それがプロテスタントの教えです。
　ですから、日曜礼拝のとき以外に、わざわざ教会まで来てお祈りを捧げる信者は、ほとんどいません。
　でも私としては、神様に来ていただくのではなく、人の子が神様の前へ足を運ぶべきだと思っています。これは信仰ではなくて気分の問題です。
　かすかな足音が背後に聞こえました。珍しく私より先に起きて外へ出ていると思ったら、ここに隠れていたのですね。
「今日も一日、精一杯に働いて……」
　すぐ後ろまで気配が迫りました。
「こらっ！」
　振り返りざま、叱りつけました。
「わっ……？！」
　跪いている私に合わせて腰をかがめていたのでしょう。ジャックは見事に尻餅をつきました。

「礼拝堂でふざけてはいけないって、何度も言ってるでしょう」

クリームたっぷりのコーヒーにうんと砂糖を入れたみたいな顔が、はにかんだように笑っています。

「ごめんなさい……」

しおらしく謝って立ち上がると……

ぺちん。私のお尻を（かなり強く）叩いて、そのまま掌を上へずり上げました。私にしてみれば、強い力で撫でられた感じです。

「へっへーん。姉ちゃんのおけつ、いい音がするね」

憎まれ口を叩きながら礼拝堂から駆け出て行きました。礼拝堂で走るな騒ぐな――注意する暇もありませんでした。

ジャックの悪戯には手を焼きます。でも、私より二つ年下。つまりようやく十二星座を巡り終えようとしている弟には、男の子が女の子のお尻とか胸を触るのは淫らな行為だという自覚はないのです。お姉ちゃんがうろたえるから面白がっているだけなのです。

私？　もちろん、淫らな行為だと分かっているから、ジャックを叱るのです。

そういう行為が性的な意味を持つとはっきり知ったのは、半年前に女性器から出血して父様に相談したら、雑貨屋（ドラッグストア）のスーザン小母さんが代わりに教えてくださって、そのときにあからさまなことも少し教わりました。

神様の目の前で淫らなことを考えるのは不敬です。もうお祈りを続ける気分ではありません。

「アーメン」

お祈りは端折って、朝の日課に向かいます。礼拝堂と住居は棟続きで通用口もありますが、神様と正しく向かい合うには正面から出入りするべきだというのが、私の信条です。

ああ。私はこれから礼拝堂とか住居とか教会とかを使い分けてお話しするでしょうから、最初に説明しておきますね。教会の敷地の中はすべて教会です。同語反復でした。

敷地の中に、信者が集まる礼拝堂と牧師の家族の住居があります。小さな事務室もくっ

ついています。小人数の集会に使う小綺麗で頑丈な「掘立小屋」もあります。あと、家畜小屋とか納屋とかも。畑は建物ではないので、常識として教会とは言いません。これは冗談でした。

真面目な話をします。今日は月曜ですから、助手のボブさんは来ません。食事の用意は三人分だけです。支度が出来たら、フライパンをおたまで打ち鳴らして合図をします。三人で食卓に就いて、神様に感謝の祈りを捧げてから、私と父様は食事を始めます。弟は、食事を終えかけるところ――といいたいぐらい、ぱくつきます。

父様とか弟とか言っていますけれど、実の家族ではありません。

父様はオットー・ヒュンケル。ここ、人口千人ほどのコッパーベルタウンにある唯一の教会を司る牧師様です。三十五歳です。カウボーイたちと喧嘩をしても（しませんけれど）二人くらいならまとめて相手に出来そうなくらいに頑丈です。年上の人に説法をしてもなめられないようにと、髭もじゃです。髪も髭も赤茶色です。生涯独身の誓いを立てておられます。

父様は法律的には養父（Adoptive father）なのでしょうが、私としては義父（Father in law）をもじって心父（Father in heart）がふさわしいと思っています。

弟はジャック・ヒュンケル。教会の前に捨てられていた黒人との混血です。黒い縮れ毛を短く刈っています。甘ったるい顔つきだと思うのは白人の美的基準からだけらしいです。

彼はおそらく、父親が黒人でしょう。母親が黒人なら、彼女の雇用主に保護されて、いずれは労働力にされるか売り払われ／ではなくて／奉公に出されます。けれど母親が白人なら、控え目に言ってスキャンダルです。中絶されたり出生直後に殺されたりしなかっただけ幸運です。

私、ジュリア・コバーニも、彼と同じくらいに出自が不明です。父様とも弟とも違って、銀髪（シルバーブロンド）です。瞳も碧いので、北欧系かもしれません。でも、母様の姓はコバーニですから、ラテン系かもしれません。血統が不明なのは、母様はロマ（ジプシー）の民で、事情は知りませんが仲間からはぐれたか追い出されたかして、やはり教会の前で行き倒れたからです。身の

上を語る暇もなく私を産み落として、すぐに亡くなりました。私の名前は、母様に付けていただきました。ファミリーネームも、母様のを受け継ぎました。

私は生粋の白人なので出自がロマの民でも、町の人たちからあまり差別は受けていません。

ああ、ジャックだって表立った差別は受けていませんよ。なにしろ、父様が牧師様なのですから。元奴隷の子供たちからは半分白人と思われています。友達と呼べる子はひとりもいなくて、だから私に甘えたり悪戯を仕掛けたりするのです。

ジャックは将来のことを考えるのは早すぎますが、私には確固たる目標があります。ほんとうは父様の後を継いで牧師になりたいのですが、世間の人たちは女がしゃしゃり出ることを望みません。聖書にもはっきりと、女は男に劣ると書かれています。ですから、私は将来は修道女となって、神様に一生を捧げるつもりです。私たちはプロテスタントですから、カソリックのような厳密な組織としての修道院はありませんけれど、熱心な信者が同性で集まって清貧な生活を営み奉仕活動に精出すという意味での集団は、この州にも幾つか存在します。

父様も賛成してくれています。でも、責任ある社会人として誓約できる年齢には達していないので、受け入れてもらえません。今は教会のお仕事を出来るだけ手伝いながら、生活態度だけでも修道女と同じように、敬虔に清く勤勉であろうとしています。

ちらっと触れたボブさんは、教会の助手です。専属ではなく、週末だけに来てくださるボランティアです。二十二歳ですから、じゅうぶんに私と釣り合う年齢です。もっとも、向こうは私のことを……せめて、妹くらいには思ってくれると嬉しいのですけれど。

などと、朝っぱらから浮ついたことを考えてはいけません。

台所の後片付けが終わったら、私も農作業です。信徒の皆様からの浄財は、出来る限り教会の維持と修繕にまわします。小麦も野菜も卵も牛乳も、教会の小さな農場で賄います。

朝の私の仕事は乳搾りです。雌牛の横に座って、子供のペニス（という単語も、スーザン小母さんに教わりました）くらいもある乳首を両手にひとつずつ握って、左右交互に搾

っていきます。

ふう。また、ジャックが忍び足で近づいて来ました。叱っても叱っても懲りないので、今日は作戦を変更します。

むぎゅっと、背後から左右の乳房をつかまれました。私は、平然を装います。

「姉ちゃんのお乳は、ぼくがしぼってあげるよ」

無視していると、ぎゅううっと強くつかんで、私が雌牛の乳を搾るリズムに合わせて、もぎゅもぎゅと指を食い込ませてきます。

私は背丈では二つくらい下の年齢に見間違われますけれど、そんな人も私の乳房に気づくとレディに対する口調に改めます。改めすぎます。若い男性には、じゅうぶんに恋愛の対象に見えるのでしょう。それが厭だから、私は（寝るときを除いて）胸にきつく布を巻いています。コルセットは身体の線を強調するので、そもそも持っていません。

その布を越えてジャックの指が食い込んできます。痛いのですけれど、意地になって無視を決め込みます。

「姉ちゃん、平気なの？」

「いくら私の乳房を搾っても、お乳は出ないわよ」

わざと見当はずれな答えを返してやりました。

「ちぇええ……」

私が取り合わないと分かると、ジャックは逃げて行きました。

私は乳を搾りながら、なんとなく落ち着かない気分です。ジャックの指は痛かったけれど、まだ残っている疼きが、だんだん熱を帯びてきたような……錯覚ですね。

牛の世話を終えると、すぐに昼ご飯の支度に取り掛かります。

午後からは、乾燥させておいた麻から糸を作ります。繊維が長いので、綿のように紡ぐ必要がありません。来週あたりからは麻糸を使って亜麻布を織る予定です。女の子ひとりだけの手ではたいした量を作れませんが、シーツや家族の下着を作る分には足りています。

父様と弟が野良仕事から帰って来ました。まず父様が身体を洗って、私が出しておいた清潔な下着に着替えてから私の部屋をちょっと覗きます。

「おお。ずいぶんと捗っているね。関心、関心。それでは、ちょっと出てくるからね」

町の反対側にあるサロンへ通うのが日課になっています。酒場も兼ねていますが、父様はお酒を飲みません。カウボーイや職人さんたちと、世間話をしながら遊ぶのです。サロンでの遊びといえば、ポーカーのような賭け事が真っ先に浮かびますが、父様は神様に仕える身ですから、チェッカーです。町長のディーラーさんとか銀行頭取のギャレットさんがいらっしゃれば、チェスをすることもあります。

父様が出て行かれて十五分もした頃です。

「姉ちゃん……助けてよお」

半べその声が聞こえてきました。あわてて裏庭へ出てみると、弟が行水桶の中にうずくまって両手で股間を押さえていました。

「ぼくのピストルが……変になっちゃったよお」

ピストルというのは、あまり一般的ではないようですが、ペニスの婉曲あるいは幼児的な言い方です。おしっこ(ピス)とも通じますね。とにかく、ピストルがどんなになっているのか、見ないことには始まりません。いやがるのを叱って、手をどかせました。

「まあ……？！」

ふだんは私の小指くらいなのに、父様のペニスの半分くらいにまで大きくなっています。父様のは垂れていますが、今のジャックのは、お腹にくっつくくらいに上向いています。これが、勃起という現象なのでしょう。しかも、普段とは違って、薬莢から飛び出たスラッグ弾みたいになっています。

こういうときには、エロチックなことからうんと遠くてややこしい事柄を考えれば良い——というのは、スーザン小母さんではなく、去年からサロンで働き始めたマリーさんから聞きました。エロチックからいちばん遠いのは、お祈りだと思います。でも、不謹慎ですし、ややこしくもありません……そうだ。

「いいこと。落ち着いて聞くのよ。塀で隠れた向こう側には、鶏と牛が合わせて五匹隠れているの。そして、塀の下から十四本の足が見えているわ。鶏と牛とは、それぞれ何匹いるか分かる？」

「何言ってんだよ。赤ちゃんだって、牛の足と鶏の足を見まちがえるはずがないぞ」

それは、まあ、そうですけれど。でも、見る見るうちにペニスがうなだれて縮んで、先端まで薬莢の中に引っ込みました。

「ジャック、正直におっしゃい。ここをいじってたんでしょ？」

「違うよ」

弟は怒ったように答えました。

「お姉ちゃんのおっぱいをつかんだときのことを考えただけだよ」

そちらのほうが、罪は重いです。でも、どう言ってたしなめたら良いのか分からなかったので。

「元に戻って良かったじゃないの」

適当にごまかして家の中へ引き返しました。

晩ご飯が終わって。居間に三人が寄り集まって。私は繕い物をしたり趣味のレース編みを進めたり。弟は小さな黒板を使って二桁の足し算の勉強。父様は新聞です。面白い記事があると、読んで聞かせてくれます。

そして最後に、居間で三人いっしょにお祈りをします。

電気代がもったいないので、午後九時には寝ます。それでも、十年くらい前までは明かりはランプしか無くて、午後七時には眠りに就いていたのですから、ずいぶんと夜更かしになったものです。その分、朝は遅くなりましたけれど。

ひとり闇の中に身を横たえて。なかなか寝付けません。ジャックの勃起したペニスが、瞼の裏に浮かんできます。あれが、女の子のヴァギナに挿入されるのです。いえ、あれではありません。大人の男性でしたら、父様のペニスと同じくらいです。それが、倍くらい

にも大きくなって……私のヴァギナに、本当に入るのでしょうか。ジャックのですら怪しいと思います。

それから……ジャックにつかまれた乳房が、また疼き始めました。強い力。あれが、男性の片鱗なのでしょう。

あれとこれとを考えると、腰のあたりが熱くなってきます。胸が苦しくなってきます。

私は背丈が発育不良で胸が発育過剰です。では、ヴァギナは？

指くらいなら入るかな？

布団の中で手を動かして、股間に触れてみました。なんだか、ぬるぬるしています。もう三年くらい前から……淫らなことを考えると、こうなるのです。白状してしまうと、自分の女性器に触るのも、これが初めてではありません。でも、こんなにどきどきするのは初めてです。

指くらいなら入るかな？

その考えが頭を去りません。人差し指をクレバスの中へ滑らせました。穴（ヴァギナ）は、すぐに探り当てました。縁に触れると、くすぐったいです。腋をくすぐられたときとは、ちょっと違います。心臓がどきどきしています。

つぷっと……簡単に指が入りました。でも、赤ちゃんに指を吸われているみたいな感じ。とても二本三本は入りそうにありません。大人の勃起したペニスはもちろん、ジャックのすら無理でしょう。

ああ、そうか。それでも無理にこじ入れるから、マリーさんが言っていたように「最初はすごく痛い」のでしょう。

そこでやめておけば良かったとは、後になって思ったことです。ヴァギナから指を引き抜いたものの、なんだか満たされない気分のままに、ラビアをなぞっていました。

「あっ……？！」

びびっと電気が走ったみたいな感覚がありました。町に来た「科学サーカス」の興行で感電を体験したことがありますが、そのときみたいな痛みはありません。甘い感電とでも

いうべき感覚です。

たしか、クレバスの上端あたりを……

「ああっ……」

また感電しました。そして、はっきりと「電極」が分かりました。左右のラビアが合わさっているあたりに、小さな疣(いぼ)があるのです。そこに指が振れると、疣から腰の奥へ向かって、途中でヴァギナも通りながら、電気が奔るのです。それが、とても甘い――なんて言葉では追いつきません。じいんと腰が痺れて、頭に淡い霞がかかります。

その霞は、はっきりとピンクに染まっています。だから、これは淫らなこと、いけないことだと悟ってしまいました。オナンの罪という言葉が自然と浮かびました。オナンは、妻を孕ませない工夫をして男女の営みに及びました。

「でも、今ではそういう意味じゃあなくなってるのよ」

またも、マリーさんの言葉を思い出しました。

「そのうち、自分で覚えるわ。そうならないうちは、まだまだネンネってことだわよ」

ああ、マリーさんの言葉に隠されていた真実に目覚めてしまいました。そうなってしまったのです。

いけないことだと分かっていながら、指は身体は、また感電を欲しがります。

ただ疣に触れるだけでなく。この疣には「芯」があって、それを皮が包んでいます。その皮をくにゅくにゅとつまむと芯まで刺激されて、いっそう強い電気が奔ります。

股間に触れていいのは、最も汚らしい排泄の後始末と、最も崇高な子作りのときだけです。神様が、そうお定めになったのです。こんな、自分の快楽のためにだけ刺激するのは涜神です。悪魔の誘惑に負けているのです。

それが分かっているのに、指の動きを止められません。だんだんと速くなっていきます。でも、ジャックに乳房をつかまれたみたいに（そう思った瞬間、胸にきゅうんと熱い感情が込み上げてきました）強くつまむと――痛いだけです。嘘です。痛いのだけれど、その奥に甘い感覚があります。むしろ……お菓子を作るとき、生地に少量の塩を混ぜるといっ

そう甘みが引き立つみたいに。痛いのと気持ち良いのとが混じり合って……

「あああっ……（何か来る）？！」

叫びかけて、あわてて片手で口を押えました。もう一方の手は、股間から放すことが出来ません。片手だけでは物足りないので、シーツを引き寄せて丸めて口に入れて。右手で疣を刺激しながら、左手でヴァギナに指を挿れてみました。

「……！」

ぶわあっとヴァギナが爆発したような感覚。頭の中のピンク色の霞が、部屋いっぱいに拡がって……

「ふわあああああ」

口からシーツを吐き出して、幸せな溜息を吐きました。そのまま、ピンク色がだんだん暗くなっていって……

罪の意識とともに目を覚ましました。

我を忘れて、悪魔の誘惑に負けてしまったのです。私は、なんという罪深い行為をしてしまったのでしょう。神聖な子作りのために使う器官を、一時の快楽の道具にするなんて。

ロザリオを繰る想いで三つ編みを結い直しました。それをスカーフで包みます。修道女の被り物（ウィンプル）を真似て、起きている間はずっと髪を隠しているのです。

朝のお祈りでは、神様にお赦しを願いました。そして、贖罪のためにも昨日より頑張って仕事をしようと自分に誓いました。

昨夜に気づいた疣のこともジャックの勃起したペニスのことも考えないようにしました。でも、ジャックが台無しにしてくれました。

乳搾りのときも、考えないということばかり考えていたので、ジャックの気配に気づきませんでした。不意に乳房をつかまれました。どうにか、驚かずにすみました。

「しつこいわよ。お乳は出ないんだったら」

「ぼくも算数の問題を考えたんだよ」

昨日よりは優しい力で乳房を揉みながら、身体を密着させて耳元に囁きます。

「雌牛と人間と、合わせて七頭。おっぱいは十二個。それぞれ何頭だ？」

全部人間とすると乳房は十四個……暗算が間違っているのでしょうか。背中に押し付けられたジャックの身体の一部が、すごく硬くて、考えがまとまりません。

「降参、分からないわ。手を放して」

「雌牛が三頭と男の人が四人だよ。男には、おっぱいが無いからね」

種明かしはしてくれましたが、手は放してくれません。

「いい加減にしないと、朝ご飯はあなただけ牛乳抜きにするわよ」

「分かったよ。それじゃ、バイバイ」

声に合わせて強くもぎゅもぎゅと揉んでから、駆け去りました。

ムウウウ～

雌牛に乳搾りを催促されて、我に還りました。乳房を揉まれたのと背中の感触とにぼうっとしていたようです。

結局、一日中あれこれ考えるというか思い出すというか。ジャックのペニス。昨日は半年ぶりくらいに見たのです。勃起していないときでも、私が覚えているよりも成長しているのかもしれません。もしそうなら、少し安心です。大人のペニスがあんな倍率で膨張するのだったらヴァギナに拳骨を突っ込まれるようなものですから。

だから、これはちっとも淫らな真似ではない――と、自分に言い訳をして。ジャックが行水を使っているときに、わざわざ玄関から出て裏庭へまわって、忍び足で後ろから近づいて覗き込みました。

「わっ……どしたんだよ、姉ちゃん？！」

「後ろからそっと近づかれると、びっくりするでしょ。仕返しよ」

一瞬ですけれど、きっちり目撃出来ました。不安が募りました。ジャックの平常時のペニスは、半年前から変わっていなかったのです。

でも、本当に？　見間違いはなかったかしら。

「今日は、ピストルは腫れてないの？」
「なんともないよ」
「それでも心配だわ。お姉ちゃんに見せてごらん」
　我ながらうまい口実です。
「平気だよ。もう、あっちへ行ってよ」
「お姉ちゃんが頼んでも、ジャックはやめてくれないでしょ。見せなさいったら」
　前を隠している手をつかんで、ひっぺがします。ジャックも本気では逆らいません。
「ふうん？」
　スラッグ弾ではなく、マスケット銃の薬包みたいです。マスケット銃の薬包は、火薬と弾丸がひとまとめに紙の筒に収まっています。
　ジャックのは、実際には薬包よりも小さいです。でも、眺めているうちに大きくなってきました。遠距離射撃の角度になるのは薬包ではなく銃身のほうですが、つまりそういうことです。
「もう、いいだろ。あっちへ行ってよ」
　手で水を掬って顔に掛けられました。完全なスラッグ弾になるのを見届けたかったのですが、あまり騒ぐと父様が様子を見に来るかもしれません。退散します。
　食事の支度をしているときも食事中も後片付けも上の空でした。レースの編み物は何度も間違えて、ほどいてはやり直し。
　今日見たジャックの平常時のペニスと昨日の勃起したときの大きさと。その比率を、ただひとりだけ見知っている大人のペニスに当てはめて。私の指を五本まとめてつぼめたよりもずっと太いでしょうから、とてもヴァギナへの挿入は不可能だと思ったり。でも先端は丸まっているから、鈍い楔を打ち込むようにして……引き裂かれるとしたら、想像を絶する痛みだろうと恐怖に捕らわれたり。それなのに、腰の奥がきゅんきゅんして、淫らな汁がにじみ出るのです。
「よし。そろそろ寝る時刻だな」

父様がそう言ったときには、ほっとしました。と同時に……今夜も寝付けない。だけではなく、きっと、悪魔の囁きに耳を貸してしまうのではないかと恐れました。

告白と贖罪

このままではいけない。目覚めてすぐに決心しました。

「牧師様。私の祈りを聴いて、私をお導きください」

父様にではなく牧師様にお願いしました。ふつうはお祈りの中で神様に罪を告白して自身で悔い改めるのですが、それだけでは足りないと思いました。

娘の願いで、しかも信者の頼み事です。父様も牧師様も、拒むはずもありません。

礼拝堂で私は聖壇の前に跪き、牧師様は横に立って、私のお祈りを聴いてくださいます。

「神様。私は悪魔の囁きに負けてしまいました。弟の、あの……男性器が大きくなったのを見て……大人のだったら、どんなに巨大になるかを想像して……私の女性器に挿入できるのだろうかと……指で触ってみて……不思議な快感を得てしまいました」

牧師様は無言で耳を傾けてくださっています。一切の罪を告白しなければ、全知全能の神様はともかく、牧師様は適切な助言を出来ないでしょう。なので、頬が熱くなるのを感じながら、すべてを告白しました。

「そのときに気づいたのです。女性器の上端に小さな疣があって、そこに触れると雷に打たれたようなショックがあります。でも痛いのではなく、ただ女性器に触れたり指を挿れたりする何百倍もの快感があるのです。これは……オナンの罪だと思います。悪魔の誘惑だと思います。でも……どうしても、やめられないのです。こんな罪深い私を、赦してくださいとは申しません。どうか、厳しく罰してください」

牧師様が信者を罰することなどありませんから、最後の言葉は父様へのお願いです。

「ふうむ……」

父様が戸惑っているのが、その短い溜息で分かりました。

「若い時分には性的な好奇心が強く、様々な過ちを犯すものです。罪であると自覚したのならば、あなたはすでに正しい道に向かって歩き始めています。しかし……」

牧師様のちょっと堅苦しい口調が、そこからはためらいがちに変わりました。

「その疣というのが気がかりだね。悪い病気でないといいのだが……この場で、父さんに見せてみなさい」

うわ……疣を見せるためには、女性器を見せなければなりません。羞ずかしい……という感情が、不純なのです。娘の身体の異変を父親が気遣うのは当然です。それに、神様の御前（みまえ）です。牧師様の行為に淫らな振る舞いが混じるはずもありません。

ジャックが入ってくることを懸念したのでしょう。父様は棟続きの住居との通路だけでなく正面の出入口にも内側から鍵を掛けました。

私は安心して信徒席の最前列に腰掛けて、スカートをまくり上げました。腰を浮かしてドロワーズを引き下ろすのは、それでも羞ずかしかったです。

父様は私の前に膝を着いて、股間を覗き込みます。

「おまえのここを見るのは五年ぶりくらいかな。ずいぶんと大人に近づいたね」

顔から火が噴き出る思いでした。子供のころに比べると、ずいふんとふっくらしてきたし、なによりも縮れた（髪よりも色が濃い）白金色（プラチナブロンド）の草叢がいちばんの変化です。

「よく分からんな。その小さな疣というのは、どれだね？」

ますます顔から炎が噴き出ます。でも、疣の種類によってはだんだんと大きくなって醜くなります。そんなことになったら結婚できません。いえ、修道女になるのが願いですから、生涯独身です。それでも、「結婚しない」のと「結婚できない」のとは大違いです。結婚できないから修道女になるなんて、むしろ恥です。

羞ずかしいのを堪えて脚を開いて左手でラビアを拡げ、自分にもはっきり見えるくらいまで右手で疣を下から起こすようにしました。

「なんと。まるで小さな……いや」

その言葉で、この疣がまるで極小のペニスみたいだと気づきました。でも、考えてみれば。女性に比べるとずっと小さいですが、不要なはずなのに男性にも乳首があります。同じことなのかもしれません。

「これが何なのか、父さんには分からない。しかし……」

父様が手を伸ばして、指で疣をつつきました。

「ひゃうんっ……くすぐったい」

ほんとうは、自分で触れるよりも強く鋭い電気が奔ったのですが、それを言うのは羞ずかしいので、くすぐったいことにしました。

「痛くはないのだね？」

「強く抓れば痛いと思います……」

「それは、どこも同じだよ。痛くないのなら、悪い病気ではないだろう」

父様の言葉から不安の響きが消えました。

「これが何であるか、すぐには分からん。家庭医学百科にも記述はなかったと思う。後でドック・フォルティに尋ねてみよう」

「それはやめてください」

「どうしてだね？」

「だって……あのお医者様は、お酒が入ると患者のことをべらべら喋る人だから」

町の噂になんか、なりたくありません。

「ふむ、もっともだが……よろしい。電話でノートン先生に相談してみよう。あの方は博学多識だからね」

ノートン先生というのは、この一帯の教区長様です。プロテスタントですから教会の定めた位階とかはありませんが、ずっと偉いお方ですので、父様は先生とお呼びしているのです。神様に仕える人なら、信者のゴシップを喋り散らしたりはしないでしょう。それに、ノートン先生の居らっしゃる場所はメコマックシティ。コッパーベルタウンから百マイルも離れています。

「変な疣が出来ていたら、触って確かめてみたいのは分かる」

父様の声が改まりました。

「しかし、性器を触って快感を得たというのは感心しないね。父親としては、娘のおいたを見過ごすわけにはいかない。ちょっと待っていなさい」

父様は礼拝堂から出て行きました。きっと、罰するための鞭を取りに行ったのでしょう。軽い罰なら、乗馬鞭で掌を叩きます。つぎが、素手で着衣の上からお尻叩き。いちばん厳しいのは、お尻を剥き出しにされて乗馬鞭です。

案の定、戻って来た父様は乗馬鞭を手にしていました。

「掌を上にして差し出しなさい」

私は失望しました。もっとも軽い罰だからです。こっそり煙草を吸った（むせて一服だけで捨てました）とかお酒を飲んだ（嘗めただけで酔っ払って、すぐにばれました）とかではなく、悪魔の囁きに負けて性器を快感の道具にしてしまったのに。あ、煙草とお酒は私ではなくジャックのことですよ。それも、私が告げ口をしたのではなく、彼みずからが反省して、潔く罪を父様に告白したのです。

失望しながらも私は素直に、両手をそろえて胸の前に掲げました。神様の前で罰を受けるのですから、居間で叩かれるよりは重い罰でしょう。

父様が乗馬鞭を振り上げました。いつもより、ずっと高い位置まで。けっして軽い罰ではないと分からせようとしてくれているのでしょう。

ビシイッ！

「い……」

痛いという言葉を呑み込みました。強く鋭い痛みですが、私の犯した罪にはちっとも足りません。

ビシイッ！

ビシィッ！

三発で、父様は鞭を下しました。

「ジュリア・コバーニ。あなたは神様に罪を告白し、さらに父親から罰を受けました。じゅうぶんに悔い改めたことでしょう」

これで、おしまいでした。

もちろん私は後悔していますが、行ないを改められるかというと……自信がありません。あんな凄まじい快感が簡単に得られるというのに。お酒を飲みすぎると身体を壊すと分かっていながら、飲んだくれる男の人は珍しくありません。これは想像ですが、酔っ払って心地良くなるよりは、疣を刺激して得られる快感のほうが、ずっとずっと大きいのではないでしょうか。すくなくとも、ジャックが最初のお酒で酔っ払ったときよりはずっと気持ち良かったはずです。

自信が無かったので、その夜は父様に頼んで、両手をそろえて縄で縛ってもらいました。

「こういう手段に頼らず、意志の力で克服しなければならないのだよ」

それは分かっています。こうやって、悪魔の囁きに身を委ねずに安らかに眠る夜を続けるうちに、あんな快感のことなど忘れてしまえるでしょう。

……駄目でした。手で疣を刺激することはできないのですが。強く腿を閉じ合わせて、ぎゅうっと脚を突っ張ると――昨夜ほどの快感はありませんけれど、じんわりと気持ち良くなってくることに気づいてしまったのです。そうなると、だんだん悪魔の囁きがはっきりと聞こえてきます。

腿を閉じ合わせるだけでなく、前後に小刻みに擦り合わせる。それでも満足できなくなってくると。いったん身体を起こして、枕を腰の位置までずらして俯せになりました。疣に枕が当たった状態で腰を揺すると……

「あんんっ……神様、お赦しくださいッ！」

ずうんと、腰の奥まで電気が奔り抜けます。まだまだ物足りません。前で手首を縛ってもらっただけですから、ネグリジェの裾をまくってドロワーズを脱ぐくらいは簡単です。

剥き出しの股間を直接枕に押し付けて、腰を揺すると……

「いいいいいいっ……」

声が大きくなったので、シーツに顔を押し付けて口をふさぎました。

まだまだ指で刺激するには遠いのですが、そのもどかしさが快感への欲求を強くします。腰を揺すったり、腿を擦り合わせたり。しつこく続けていると、瞬間的な電気ではなく、ダムにだんだん水が溜まっていくような感じになってきて。ダムが決壊したときの凄まじさが予感されます。

水をどんどん注ぎ込もうとして、意識してジャックの勃起したペニスを脳裡に描いたり。大人の（どうしても、父様のしか描けません）ペニスが巨大に怒張して私のヴァギナに突き立つところを想像したり……

（ダメ……来ちゃう、きちゃうううううう！）

とうとう、快感の頂点まで達してしまいました。

頂点に登り詰めるまで、ずいぶんと時間が掛かったのでしょう。私は罪の意識に苛まれながら幸せな気分にも包まれて――お寝坊をしてしまいました。ノックの音にも目を覚まさないくらい。

「これは……ジュリア、起きなさい！」

怒っているような困惑しているような父様の声が、眠りを破りました。

「んんん……あ、父様。おは……きゃああっ！」

俯せのまま、お尻まで丸出しにして、オナンの罪を犯した証拠を歴然と残して、私は熟睡していたのです。

「朝食の後で礼拝堂まで来なさい」

父様の厳しい声に、私はうなだれるしかありませんでした。

ベーコンは焦がすは目玉焼きは潰すは。出来損ないの朝ご飯に文句を言ったのはジャックだけでした。私は砂を噛むような思いで、それでも神様のお恵みを無駄にしないために、残さず食べました。父様も、同じ気持ちだったかもしれません。

そして、礼拝堂です。

牧師様は背広に着替えたうえで、黒いガウンまで羽織っています。日曜の集会に臨むときと同じ正装です。今日は、最初から乗馬鞭をお持ちです。

「神様に告白しなさい」

厳しい顔でおっしゃいました。

私はいつものように聖壇の前に跪いて、昨夜の罪を洗いざらい告白しました。昨日よりも、もっと言葉がつかえました。声はか細くなりました。

それでも、昨日の三倍くらいの時間を掛けて、そのときに感じていた快感も含めて、洗いざらい告白しました。

「スカートをまくって、下着を下ろしなさい」

昨日と同じように入口に鍵を掛けてから。厳しい声で父様が命じられます。

私は素直に従います。羞ずかしいけれど、昨日はもっと間近に、奥のほうまで見られています。

「向こうを向きなさい」

今度は従いませんでした。

「……お尻なんかでは生ぬるいと思います」

言ってしまいました。悪魔の囁きに負けてオナンの大罪を犯した私にはどんな罰がふさわしいか、ずっと考えた末の結論です。

「どうか……罪の根源を罰してください」

自分で言い出したことですが、声が震えています。強くつまんだけで痛みが奔るのです。鞭で叩かれたときの激痛は想像を絶します。きっと、二度と罪を犯すまいと肝に銘じることでしょう。

言葉だけではなく。鞭で叩きやすいように、脚を一フィートほど広げました。スカートの裾をきつく握って、胸元まで引き上げました。

「ううむ……」

父様はためらっています。その間も、剥き出しの股間は空気にじかに曝されています。

それを冷たく感じるのは……まさか、淫らな汁がにじんではいませんよね？
「よし」
　父様が大きく頷きました。
「それぐらい厳しくしないと、悪癖は治らないかもしれないね。女は罪深い生き物だと、聖書にも書いてある」
「はい……」
　私はあらためてスカートの裾を握り締めました。怖いので目を閉じましたが、いつ叩かれるか分からないのはもっと怖いので、やっぱり開けておきます。
　父様が乗馬鞭を下手に構えました。
　ヒュンッ……
　ヴァギナに鋭い風を感じましたが、空振りでした。
「やはり、娘の急所を鞭打つとなると、腕が萎縮するな」
　仕切り直しです。
　ひゅんっ、パチイン！
「きひいいっ……！」
　股間を真っ二つに引き裂かれたような激痛。それが背骨から脳天にまで突き抜けました。思わず股間を押さえてしゃがみ込みました。
「だいじょうぶか？」
　父様はおろおろしています。
「はい……」
　私は立ち上がって、鞭を受ける姿勢に戻りました。
　だって……音の感じでは、お尻を叩くときの半分も力が入っていません。そんなのをたった一発では、たいした罰にはなりません。泣き喚くくらいにしてもらわないと、効き目がないでしょう。
「もっと罰してください。どんなに泣いても、手加減しないでください」

言いながら、目まいを感じていました。重い罪には厳しい罰が必要なのです。鞭打たれたせいでしょうか。ますますヴァギナが濡れてきました。これは、けっして淫らな汁ではありません。打撲傷は出血しなくても、打った部分にリンパ液が溜まって腫れます。それと同じだと思います。

父様はためらっていましたが、私がスカートをまくったまま鞭を待っているのを見て、心を決めたようです。

「では、あと二発を与える。この痛さに懲りて、二度とおいたをするんじゃないよ」

今度は慎重に狙いをつけるためでしょうか。腕を伸ばして、鞭の先端のチップを私の股間にぴたりと当てました。皮革の冷たくて滑らかな感触が、ラビアを震わせます。早くチップを引いてくれないと、染みを作ってしまいそうです。

父様が無言で鞭を下げました。腕を後ろへ引いて……

ひゅんっ、バチイン！

「ひいいっ……！」

私が「だいじょうぶ」と答えたせいでしょう。最初に倍する激痛です。鞭の音も違いました。それでも、痛みの性質が分かっていたので、スカートの裾を握り締めたままで耐えました。

ひゅんっ、ピチッ……

狙いが狂って、チップの先端が掠めただけでした。

「きゃあああああっ……？！」

雷に直撃されたような、太い針を突き刺されたような激痛が腰を砕きました。両手で股間を押さえてうずくまっただけでは足りず、床に転がって悶えました。

「ううう、痛い……」

口に出して言うと。激痛はそのままなのですが、その奥からかすかに甘い疼きがにじみ出てきます。けっして快感ではありませんが……小さい時分に感じていた、泣きじゃくった後の満ち足りたような思い……

「ジュリア。また悪魔がおまえを誘惑しようとしたら、今の痛みを思い出しなさい」
「はい。ありがとうございます……父様」
　私に罰を与えたのは、牧師様ではなく父様です。最後の訓戒も父様のお言葉だと思いました。
　私はいつものように朝の日課を始めましたが、昨日に輪を掛けて渉(はか)が行きませんでした。鞭の痛みのせいです。痛みを抑えようとすると、がに股になってしまいます。いくらスカートを穿いているからといって、股を開くなんてはしたないです。脚を揃えて歩くのは、鞭打たれた部位をこねくるのと変わりありません。痛みが強くなって、女の子のもっとも羞ずかしい部分を、いくら父様とはいえ、血のつながっていない男性に見られて鞭打たれたという想いは、なぜか切ない気分を引き出します。気がつくと、内腿までリンパ液（そうに決まっています。淫らな汁なんかではありません）が垂れています。
　――そうして、どうにか一日が終わりました。でも、ここからが試練なのです。
「今夜も悪魔の誘惑に負けてしまいそうかね？」
　父様のほうから切り出してきました。私は、黙ってうなずくしかありません。
「ノートン先生の見解では、女性器をいじってオナンの罪を重ねていると、淫魔に憑りつかれるそうだ。今夜は絶対に自涜行為が出来ないようにしてあげよう」
　淫魔。聞くだに恐ろしくも穢らわしい言葉です。そんな魑魅魍魎に憑りつかれたら、墜ちゆく先はインフェルノ。いえ、その前に――魔女として告発されて、火焙りにされてしまいます。魔女狩りは大昔の旧大陸だけの話ではありません。今でも（コッパーベルタウンみたいに）小さな田舎の町では、ときどき一人か二人の魔女が処刑されているという噂です。せいぜい州の半分くらいしか扱わない新聞に記事が載ったことはありませんけれど。
　父様は、私をベッドの上で手足をX字形に広げさせると、手首と足首に縄を巻きました。手首の縄はヘッドボードの向こうを通し、足首はベッドの脚につなぎました。腿を擦り合わせられないように、膝の上も縛られました。
「これなら安全だね。念のために牧師として聖なる封印をしてあげよう」

そう言って牧師様は、私の唇にキスをされました。それから、ぽんぽんと股間を叩いてから十字を切ってくださいました。

父様は毛布を掛けてくれてから、電気を消して部屋を出て行きました。

ひとり闇の中に取り残されると。さっきの仕種は、ほんとうに牧師様としてのものだったろうかと、淫らな疑問が頭に浮かびました。唇にキスをして女性器に触れる。言葉にしてみると、男性が女性に性的な意味合いを込めて触れる仕種と、まったく違いがありません……などというのは、悪魔の囁きに決まっています。

やがて、居間から漏れる明かりも消えて。父様の部屋のドアが開いて閉じる音がしました。

それから三十分もした頃。まだ寝付けないでいる私は、部屋のドアがそっと開いた気配に気がつきました。同じように静かにドアが閉じて。忍び足が近づいて来ます。家には父様とジャックしかいなくて、父様がこんな悪戯をするわけがないのですから、ジャックに決まっています。

「へへへ。あくまにお礼を言わなくちゃね」

とんでもないことを耳に囁きながら、ジャックが毛布を剥がしました。

「今夜は雌牛みたいに、じかにおっぱいをしぼれるね」

ネグリジェのボタンを外しに掛かりました。

「やめなさい。父様に言い付けるわよ」

父様を起こさないように、声をひそめてたしなめました。

「うわあ、それは困るな」

暗闇の中では、ジャックの表情はまったく見えません。でも、悪戯っぽい声なのは分かります。

ジャックはシーツを引きずり出すと、端を私の口に押し付けました。

「口をふさぐつもり？　いい加減にしないと本気で怒るわよ！」

「ベティはミックをおこらなかったよ。最初はあばれてたけど、すぐにきげんを直したも

の」

ベティとミックは、わたしより少しだけ年上の恋人同士です。ミックのしつこいアプローチに辟易していたのに、三か月ほど前に急に態度を変えて、今では年内にも結婚するのではないかというくらいに相思相愛です。つまりジャックは、ミックがベティを強引に口説いている現場を盗み見していたのでしょう。

いつの間にかジャックも、そういった事柄に興味を持つ年齢になっていたのです。

ふっと、私にためらいが生まれました。ジャックは年下ですけれど、もうペニスを勃起させるようになった男性です。私とジャックも、当然ですが血はつながっていません。もしも……いいえ、絶対に駄目。

心の揺れに付け込まれた形で、口の中にシーツを押し込まれました。

「む゛も゛お゛お゛……」

叫んだつもりですが、くぐもった呻きにしかなりません。とても部屋の外までは聞こえないでしょう。

「やさしくしてあげるよ。ひどいことはしないからさ」

ふだんのジャックとは、まるきり違う口調です。ミックの受け売りでしょう。

ジャックの手がネグリジェのボタンに掛かりました。

おもいきり暴れたら、ジャックは怯むでしょう。本気でお姉ちゃんが怒るとものすごくおっかないことも思い出すでしょう。

でも……若い男性に襲われていると思うと、恐怖で身体が竦みます。というのは嘘です。何をされるか、ちょっぴり興味が湧いたのです。基本的には、私たちは仲の良い姉弟です。彼は自分の言葉を守って、わたしにひどいことはしないでしょう。

わたしが動かなくなると、ジャックは安心してネグリジェの前をはだけました。

「うわあ……思ってたよりずっと大きいや」

昼間は胸にきつく布を巻いて、乳房を実際よりも小さく見せかけています。父様が私の女性器を見たのが五年ぶりだったのと同じくらい、ジャックも私の裸を見ていません。私

が身体を洗っているところを覗き見していなかったとは、なかなかに感心です……では、ないです。こんなことをしているのですから。

ジャックは両手で私の双つの乳房をわしづかみにしました。ぎゅうっと強く搾ります。

「い゛あ゛い゛……」

私の訴えが耳に入っていないようです。乳首も強くつまみます。

「ちぇええ。やっぱり、無理かあ……」

雌牛の搾乳のことを言っているのだと分かりました。あれは、乳房を揉みながら乳頭を搾るのですから。私では、それが出来るはずがないです。

「だけど、昼間よりはずっとやわらかいや」

手触りを楽しむかのように、もう十秒ほどもふにふにと揉んでいましたが、すぐに飽きたみたいです。でも、それだけでは終わりませんでした。

「こないだから、姉ちゃんに見られてばかりだったよね。不公平だ」

ジャックの手がドロワーズに掛かりました。

「あ゛え゛あ゛あ゛い゛……！」

厳しく叱りつけました。逆効果でした。

「静かにしてよ」

さらにシーツを捻じ込まれました。

ジャックは落ち着き払った手つきで、私のドロワーズを太腿の途中まで引き下げました。

「うわあ……もじゃもじゃだあ。色は違うけど、ベティやミックそっくりだ」

ジャックも、わずかに縮れ毛が生えているのですが、ペニスのすぐ上にちょろっと芽吹いている程度です。初夏の草原みたいな私とは、ずいぶんと違います。

「へええ。なんか割れ目（クレバス）からはみ出てるね？」

指摘されて、羞ずかしいよりも不安を覚えました。ふだんは一本筋の股間なのですが、淫らなことを考えたり、そういう気持ちで弄ったりすると、内側にある小さな肉片が膨れてきて、ラビアからはみ出すのです。そんなときは……

「なんか、濡れてるよ？」
　そうなってしまうのです。
　ジャックを小さな男性だと意識して、男性に淫らなことをされていると思ってしまったせいでしょう。
「ぼく、前から思ってたんだよ。クレバスの中はどうなってるのかなって」
　ジャックがラビアを指でなぞります。それだけでなく、指を挿れてきました。
「暖かいし、ぬるぬるしてるし……」
　他人に指を挿れられるのは生まれて初めてです。自分の指とは違って、ものすごい異物感です。
「あれ……まだ奥があるぞ」
「あ゛え゛え゛！　あ゛え゛……！」
　ずぶっと、容赦ない力でヴァギナを穿たれました。
「い゛あ゛い゛っ！」
　自分の指を二本挿れた以上の痛みが奔りました。
「あっ、ごめん……」
　私の悲鳴が本物だと分かって、ジャックは指を抜いてくれました。でも……
「ベティは、指くらいじゃそんなに痛がってなかったよ。ミックに押しつぶされたときには泣いてたけど」
　優しくすれば大丈夫とでも思ったのでしょう。今度は周辺をまさぐるような感じで、また指を挿れてきました。
　ミックがベティを押し潰した。つまり、ペニスを挿入するという具体的な行為までは理解していないのでしょう。それなら、少しは安心です。腰の奥がきゅんきゅんしてきました。ヴァギナなんかより、あの疣を触ってほしい。そう思ってしまいます。
　でも、そんな密かな願いは叶えられませんでした。
「こらあっ！」

ばあんとドアが開かれました。眩い光が部屋に溢れます。父様が、怖い顔をして私たちを睨んでいます。右手に乗馬鞭を持っています。

「おまえたち、何をしている！」

私もひとまとめに叱られました。

「ジャック、着ているものを全部脱げ」

これまでに見たこともない形相と、聞いたこともない怒声です。

「あの……ごめんなさい」

「黙れ。口を閉じて手を動かせ。裸になれと、父さんは言ったぞ！」

権幕に怯えて、ジャックはすぐに服を脱ぎ捨てました。

「そこに跪け……もっと左だ」

ベッドに向かって跪かせて、上体を投げ出させます。そのときに、父様は私の腰をベッドの縁へ引き寄せました。ジャックの顔が、私の股間にかぶさりました。なぜ、そんなことをするのか、父様の意図が分かりません。

ジャックの荒い息が、私の股間に掛かります。正確にいえば、クレバスに息を吹き込まれる感じで、クレバスの上端の疣にも吹き付けます。こんなさ中にも、「電極」から電気が奔ります。

「あっ……」

びくんっと身体を震わせたのは、私のほうです。

父様は後ろからジャックの股間をまさぐっています。

「ふん。こんなときにもおっ勃てとるのか。おまえにも姉の淫魔が乗り移ろうとしておるのかもしれんな」

父様が後ろに下がって鞭を水平に構えました。

「おまえは、まだ間に合う。これで淫魔を打ち祓ってやる」

びゅんっ、バッヂイン！

「痛いっ！　父ちゃん、ごめんなさい！」

息だけでなく声までが疣に響いて、鞭打たれた瞬間のジャック以上に、私は全身を震わせました。

びゅんんっ、ズバッヂイン！

凄まじい音です。馬体を傷付けないように軽くたたくのが、乗馬鞭の基本です。今の父様は力いっぱいに鞭を叩き込んでいます。

「痛いよ！　もう、しません。ゆるしてよおお！」

びゅんんっ、ズバッヂイン！

びゅんんっ、ズバッヂイン！

びゅんんっ、ズバッヂイン！

とうとうジャックは泣き始めました。それでも、父様は手を止めません。

体格も腕力も私と同じくらいまで成長した男の子が泣きじゃくる姿は、見ていてかわいそうなのですが、なぜかじんわりと疣を刺激するような感覚を生じさせます。

私にあんな悪戯をしたのだから当然の報いだわ。そんな気持ちもあります。

ジャックの悲鳴が股間を震わせるせいもあって……また肉片が膨れて、ヴァギナから淫らな汁が絞り出されます。

カウボーイ二人分の腕っぷしから繰り出される渾身の鞭打ち。

十発でようやく赦してもらって、服を丸めて抱え込んだまま部屋から出て行くジャックのお尻は、ミルクコーヒー色の肌でもはっきりと分かるくらいに赤く腫れていました。

「さて、ジュリア……」

乗馬鞭をぴしぴしと掌に打ち付けながら、父様が私に向ける声は、すごく優しいトーンでした。

「おまえには、尻に十発くらいでは足りないね。明日、神様の前で、ずっと厳しい罰を与えねばならない」

「もぼおお」

「うん？　ああ、そうか」

やっと、口からシーツを引き抜いてもらえました。

「身動きできない私に悪戯を仕掛けてきたのはジャックです。なぜ、私まで罰を受けなければならないのですか？」

父様はゆっくりと首を横に振りました。

「おまえに憑りつこうとしている淫魔が、ジャックをそそのかしたからだ。考えてもごらん。無邪気で姉想いのジャックが、いきなりあんな淫らな悪戯を仕掛けてくるなんて、なにかおかしいとは思わないかね」

無邪気で姉想いなのはその通りですが、乳房を揉んだりお尻を触ったりも、いつものことです。私が身動きできないので、それがちょっとエスカレートしただけです。

でも……うまく反論出来ません。それに、ジャックの無邪気（でしょうか？）な悪戯の中に、私は男性の片鱗を勝手に幻想して淫らな思いを交えていたのは事実です。

やはり、私も罰せられるべきでしょう。でも、今の十発よりも厳しい罰と、父様はおっしゃいました。今朝の、私から望んだ罰と考え合わせると……背筋が凍りつくほどの恐怖に襲われます。なのに……ヴァギナから淫らな汁がこぼれて、止まりません。父様に見つかったら、もっと叱られます。

さいわいに、私の股間はジャックの涙と唾で濡れていましたから、気づかれずにすんだみたいです。

ずり下げられたドロワーズも前をはだけられたネグリジェも、元に戻してはくれず、そのまま父様は明かりを消して部屋から出て行きました。

私は、生まれて初めての体験と、なのにまったく物足りない思いとで、ひとり暗闇の中で悶々としていました。

苦痛と恥辱

　ぱちんと（かなり強く）乗馬鞭で裸のお腹を叩かれて、目を覚ましました。

　父様です。無言で縄をほどくと。

「今日も寝坊かね。食事の支度にかかりなさい」

　昨夜のことなどまったくなかったかのような、いつもの口調でした。でも。揺り起こすとか頬っぺにキスとかではなく、裸の肌に鞭を当てて起こしたのです。昨日までとは、明らかに何かが違っていると感じました。

　礼拝堂へ行ってゆっくりお祈りしている暇はありません。普段着に着替えてから、その場ですませました。

　昨日の失敗に懲りているので、料理に専念しました。トーストも焦がさなかったし牛乳をこぼしたりもしませんでした。でも、サラダの塩と砂糖を間違えました。味付けはドレッシングが中心ですから、「今朝はやけに甘いな」と父様が首を傾げたくらいですみました。ジャックは、こちらのほうが好きだと言ってくれました。

　すぐにも、昨夜の罰を受けるのだと覚悟していたら、それは午後からになりました。

　父様はジャックに、絶対に礼拝堂に近づかないようにと厳しい声で言い付けてから、私を礼拝堂へ連れて行きました。

「おや、牧師様。乗馬鞭なんかを持ってどうなさったのです」

　集会所のまわりを掃除していたボブさんが、怪訝な顔をしました。

　忘れていました。今日は金曜。土曜は安息日ですから、日曜礼拝の準備は今日のうちにすませておくのです。

「うん、御苦労様。実は、この娘がとんでもない罪を犯したのです。放置すれば、悪魔に憑りつかれかねない。厳しい罰を与えて、心を入れ替えさせるのです」

「はあ……」

何がなんだかか分からないといった顔つきです。

「ちょうどいい。君も立ち会ってください」

ええええええっ？！

罰というのは、昨日よりも厳しい罰です。昨日は私自身がお願いして、股間を鞭打ってもらいました。それよりも厳しいのですから、もっと羞ずかしいに決まっています。まったく赤の他人の若い男性に見られるなんて……

「父様。それは厭です。だって……」

「黙りなさい。これは父親としてだけでなく牧師としての務めでもあるのだ。彼は誠実な男だ。教会の恥を他人に漏らしたりはしない。そうですね、ボブ？」

「そりゃそうですとも。でも、いったいどういうことなんですか？」

「立ち会えば分かります」

父様は私の二の腕をつかんで引きずるようにしながら、ボブさんの背中を押して礼拝堂へ連れ込みました。

もう習慣になっているかのように自然な動作で、父様は出入口のすべてに鍵を掛けました。

「ジュリア・コバーン。着ているものを全部脱ぎなさい」

フルネームで呼んで改まった口調。これは父様ではなく牧師様です。でも、父様の言い付けだろうと牧師様の御指示だろうと、従うわけにはいきません。だって、ボブさんが見ています。

ボブさんに――若い男性に裸を見られる。どころか、鞭打たれているみじめな姿まで見られる。その想いが、凄まじい羞恥の中に、切ない感情まで呼び起こしました。

「あの……ドロワーズもでしょうか？」

分かり切ったことを尋ねたのは、自分を崖から突き落とすためです。

「全部と言いました」

あああああ。全身が火照って、頭にピンク色の霞が掛かってきます。私は悪夢の中でもがいているような思いで、ワンピースのボタンを外しました。ワンピースを足元に落として。シュミーズは頭から抜きました。まだ夏の名残で熱いのですが、乙女のたしなみとして下着は必須です。私は真夏でもシュミーズは着用していますし、ワンピースは半袖でスカートは思い切って大胆に膝下二インチ。腕や脹脛を曝すのさえ羞ずかしいというのに。ドロワーズまで脱がなければならないのです。それと、胸を包んでいる布。幅の広い包帯です。これをほどくと、年齢の割に膨らんでいる乳房が剥き出しになります。ある意味、下半身を見られるよりも羞ずかしいです。

ひゅう……

ボブさんの口笛です。

「こりゃあ……裏サロンでもじゅうぶん、コホン」

裏サロンの意味は分かりませんが、つまり、少女ではなく娘あるいは女として認めてくれたということでしょう。嬉しい……なんて浮ついたことを考えている場合ではありません。

「両手を頭の後ろで組みなさい。懲罰を受けている間は、姿勢を崩さないようにするのです」

言われた通りにしましたけれど。腋までボブさんに見られてしまいます。ここにもプラチナブロンドが生えています。下の毛を見られるよりも羞ずかしいくらいです。

「脚を開きなさい」

ああ。とうとう、恐れていたことを命じられました。昨日は自分からそうしたというのに、今日はすごく羞ずかしいです。でも、ボブさんにもっと認めてもらいたいなんて、訳の分からない感情も湧いてきます。

父様が正面に立って、乗馬鞭を私の股間に差し入れました。

え……？

いつも使っている乗馬鞭とは違います。二フィートの短鞭ではなく三フィートを超える

長鞭です。先端のチップも長方形ではなく、ごく短い房になっています。馬の肩ではなくお尻を叩く鞭ですから、ずっと痛いはずです。

ああ……ほんとうに、ジャックに与えた罰よりも、昨日の私が受けた罰よりも、ずっとずっと厳しい罰です。

でも……私に憑りつこうとしている淫魔を打ち祓うには必要な罰なのでしょう。

ぺちん。軽く股間を打ってから、父様が鞭を下げました。そして、腕を後ろへいっぱいに引いて。

ぶゅんん、ビッヂイン！

「きゃあああっ……！」

身体を真っ二つに引き裂かれたような激痛。昨日も同じ表現を使いましたが、間違っていました。これこそがそれです。鋭い痛みが股間のそれも奥のほうから脳天まで突き抜けました。鞭の先端が細いので、中まで食い込んできたのでしょう――なんてことは、股間を押さえてうずくまってからの思考です。

「姿勢を崩すなと言いましたね」

言葉遣いは牧師様のそれですが、響きは無慈悲です。

「……ごめんなさい」

謝らないといけない。自然にそう思いました。震えそうになる膝に力を入れて立ち上がって、両手を頭の後ろで組みました。

すぐに次の鞭が打ち込まれました。

ぶゅんん、ビッヂイン！

「きひいいっ……！」

痛みの程度が分かっていても、悲鳴を堪えられません。反射的に両手で股間をかばってしまいます。

「言い付けが守れないなら、やむを得ませんね」

牧師様が鞭を信者席に置きました。

「ボブ、脚立を持ってきてください。そこにあります」

ふだんは納屋に仕舞ってある脚立が、壁際に立ててありました。

それが聖壇の前に置かれて。父様が長い縄を持って天辺に立ちました。縄を天井の剥き出しの梁に掛けて、両端を垂らしました。

「この下に立ちなさい」

牧師様は私の手首をひとまとめに前で縛りました。そして、ボブさんと力を合わせて私を吊り上げます。ボブさんはびっくり仰天の表情を顔に貼り付けたまま、牧師様の言いなりです。

縄の端は脚立の足に結んで、ボブが重し代わりに中段に腰掛けました。なるたけ私を見ないようにしてくれているのが、せめてもの救いです。

私の足首にも別の縄が巻かれました。その端が脚立につながれます。片脚が引っ張られて、左に傾いた“λ”みたいな形になりました。脚を閉じようとしてみましたが、身体が傾いて手首に縄が食い込みます。

「では、罰を最初からやり直しましょう」

「あの……私は、何回叩かれるのでしょうか？」

「淫魔が祓われるまでです」

牧師様には、それが分かるのでしょうか。

これ以上の質問は認めないといった感じで、鞭が股間に突き付けられました。クレバスが開いているので、チップがラビアの裏側までつつきます。それはそれで、少し……なんて、淫魔に付け込まれるようなことを思っては駄目です。

「いくぞ」

鞭打つ予告をされたのは初めてです。

ぶゅうん、バッヂイインン！

「かはっ……」

息が詰まって、悲鳴を上げることすら出来ません。股間にショットガンを撃ち込まれた

かと思いました。

「右足を下ろしなさい」

打たれた瞬間に自由なほうの足を曲げて股間をかばっていたのです。体重がすべて手首に掛かって、痛いです。右足を下ろしてちゃんと（は無理ですが）立てば楽になります。それなのに――牧師様でも父様でも、その言い付けに今ほど逆らいたいと思ったことはありません。でも、どんなに困難な言い付けでも、それは私への愛から発しているのです。

ぶゅうん、バッヂイインン！

「ぎびひいいっ……！」

悲鳴を上げられるくらいには慣れてきました。でも、もう耐えられません。

「父様、いえ牧師様。もう赦してください」

弱音を吐いてしまいました。でも、牧師様は容赦ありません。

「もう一息というところか。では、淫魔にとどめを刺しやろう」

牧師様は慎重に距離を測って、腕をいっぱいに伸ばすと、クレバスの上端に埋もれている疣を乗馬鞭の先端――正確には房の付根の硬い部分でつつきます。

ラビアの裏側より何十倍も……なんでもないです。

鞭が引かれて……

しゅんん、バチイン。

「うあああああああっ……？」

これまでの四発に比べたら、ずっと軽い音でした。でも、いちばんの激痛でした。なのに……痛みの奥から、じいんと別の感覚がにじみ出てきます。快感ではありません。打ち身でしばらく経つと、腫れた部位は感覚が麻痺しますが、爪で引っ掻いたりすると妙にくすぐったいですよね。それの、うんと強い感じです。そしてなにより――淫魔の依り代を罰していただいているという喜びです。

ひゅんん、バッチイン！

「ぎひいいっ！」

ヴァギナと疣を同時に打たれたように感じました。ラビアを鞭打たれていたときのがショットガンの三十六番ゲージでさっきの疣を打たれたのが二十番だとしたら、これは十番かそれ以上です。

生温かい感触が、横に引っ張られていないほうの脚に伝わります。お漏らしをした――いえ、しているのです。

「いやああ……見ないで！」

ふうと、牧師様が溜息をつきました。

「したたかな淫魔だな。我らの注意をそらせて、まだこの娘に憑りつこうとしておる」

そんなことまで、牧師様には分かるのでしょうか。

「淫魔に限らず、悪魔は憑りつこうとする者の身体に印を刻み、それを鍵として身体を乗っ取る。疣に我らが気づいたからには、別の鍵を作ろうとするだろう。例えば――ここだ」

牧師様は鞭先を上げて、目の高さにある乳首をつつきました。純粋にくすぐったいです。

「これは、私への罰ではなかったのですか？」

私の心を入れ替えさせるための罰だったはずです。まるで悪魔祓(エクソシスト)いみたいになっています。

「淫らなことをした罰であると同時に、おまえをそそのかした淫魔を祓う儀式でもある」

なんだか釈然としませんけれど、父様であり牧師様でもある人の言葉です。疑ってはいけません。

牧師様が鞭を振りかぶりました。

「淫魔よ、この娘から立ち去れ」

ぶゅうん、バッヂイインン！

「かはっ……！」

右の乳房にショットガンを撃ち込まれたような衝撃です。しかも金的(ブルズアイ)です。房の付け根が乳首を直撃しました。

ぶゅうん、バッヂイインン！

「あぐっ……！」

今度は左です。ショックで心臓麻痺を起こす……心配は、しなくて良いでしょう。私への罰であろうと悪魔祓いであろうと、そんな危険を父様が犯すはずはありません。

ぶゅうん、バッヂイインン！

ぶゅうん、バッヂイインン！

さらに左右に一発ずつ。そこで、牧師様は鞭を下げました。

「まだ淫魔が諦めたとは思えないが、これ以上は父親として忍びない。しばらく様子をみることにしよう」

ああ。やはり父様は私を愛してくれているのです。

私は床に下ろされ縄をほどいてもらい、これもあらかじめ準備してあった救急箱を使って簡単な手当てをしてもらいました。簡単な手当てですむくらいの傷しか付かなかったのです。

礼拝の試練

乳房が痛いので布は巻かずに、そうするとブラウスがきついのですが、その姿で一日を過ごしました。身体を動かすと（ごくわずかですが）乳房が揺れて、ことに乳首が布地に擦れると、淫魔が耳元で何か囁きます。

安息日でも雌牛の乳は搾ってやらないといけません。はしたないですけれど、ブラウスのボタンを上から二つだけは外して、いつもより前かがみになって、どうにか無事にやり遂げました。

あとは、家族で居間に集まって、父様が聖書を読まれるのを聞いたり、古い新聞をそれぞれに読んだり。午後からは、激しいスポーツは駄目ですが趣味に時間を費やしてもかまいません。でも、レース編みは失敗の連続になりそうなので、そして自分の部屋にこもる

と良からぬことを（たとえ頭の中だけでも）してしまうかもしれないので、ジャックに算数を教えてやったり、作文の面倒を見てやったりしました。ジャックにしてみれば、見当違いの親切だったことでしょう。

そうして、寝るときは。昨夜と同じように手足をX字形に広げて縛ってもらいました。ジャックもさすがに悪戯を仕掛けてこなかったので、ぐっすりと眠れ……たら、どんなに良かったことでしょう。

疣を刺激したときの快感を思い出しては、それが得られないもどかしさに悶々としたり。鞭打たれたときの痛みを思い出しては反省に耽ったり。でも、鞭の痛みは……繰り返して思い出すうちに、その奥底に隠れている甘い感覚というよりも「想い」に気づいてしまいました。

また鞭打たれたい。でも、自分で鞭打たれる姿勢を保つのはつらいから、今日のように縛られて身動きできなくされて……そんなことまで考えました。

罰を受けたいと願うのですから、これは淫魔の囁きではないはずです。

そして、うとうとしていたときもあったのでしょうが、感じとしては一睡もできないまま朝を迎えたのです。

日曜は、教会は大忙しです。朝昼夕と三回の日曜礼拝です。私もオルガン奏者として出ずっぱりになります。聖歌のとき以外、お説教を聴いたりお祈りなどは信者席の最前列中央で、他の人たちに率先します。

常に注目されているのですから、身だしなみには注意を払います。お下げをほどいてブラシを掛けてから、丹念に三つ編みにします。

午前の礼拝式を始める一時間ほど前に父様、いえ牧師様が、私の部屋に来られました。

「礼拝の最中に淫魔が悪さを仕掛けてきたら大変です。厳重に魔封じをしておきましょう」

そして、さり気ない口調でおっしゃいました。

「着ている物をすべて脱ぎなさい」

自分の部屋ですし、ジャックもボブさんも居ません。頬はすこし火照りましたが、滞り

なく全裸になれました。
「うむ、これは……」
　牧師様は左手で私の乳房を強い力で握って、ぎゅむぎゅむと揉み立てます。
　たちまち、乳首がとんがってきます。風船を強く握ると手の間から小さな瘤が飛び出しますよね。あれと同じです。風船の気持ちは私には分からないので、乳房を揉まれてどう感じたかも分かりません。そういうことにしておきます。
　牧師様が、針金を乳首の根元に巻き付けました。きゅっと引き締めるので、痛いです。
「これは糸ヒューズです。漏電したときにはヒューズが溶けて電気回路を遮断することで、火事のような災害を未然に防いでくれます。ジュリアをも護ってくれるでしょう」
　電気は近年の発明です。天地創造のときから存在している悪魔にも通用するのでしょうか。それよりも。乳首の上でヒューズが溶けたりしたら、火傷をするのではないでしょうか。
　牧師様は、背広のポケットから小壜と細い刷毛を取り出しました。壜の蓋を開けると、つうんとミント強い香りがしました。ふつうのミント水よりアルコールの量がずっと多いようです。
　それを刷毛で乳首に塗り付けます。塗るというより、くすぐるような刷毛先の動きです。
「くふっ……」
　くすぐったさに身をよじりましたが、叱られて慌てて姿勢を正しました。
　すぐに、くすぐったいどころではなくなってきました。ミントが沁みて、乳首がすうすうする。そう感じたのは、三十秒と続きませんでした。乳首全体が火に焼かれているみたいに熱く疼いてきました。くすぐったいのと熱いのとが合わさって、針が突き刺さるような痛さです。なのに、その奥で官能が蠢いています。
　さらに牧師様は乳房全体にも塗っていきます。じきに、乳房全体が燃え上ります。
「これだけ念入りに聖水を塗っておけば、ここから淫魔が侵入することは不可能でしょう」
　ほうっと息を吐いてから、牧師様はいっそう優しい口調でお命じになります。

「いつもの布で胸を包みなさい」

大きな胸のままで人前に出るのは、裸でそうするよりはましですけれど、それに次ぐくらいには羞ずかしいです。

布を巻くと、熱く火照っている乳首に布が擦れて、歯を食いしばるくらいに痛いです。でも、少しだけ快感も混じっています。だから、耐えられました。

「さて。淫魔のペニスにも封印を施しましょう」

どこのことをおっしゃっているのかは明白です。疣をそうだと断定するのは――木曜にサロンへ行ったとき、ノートン教区長様に電話を掛けて、そのように教えていただいたのでしょう。金曜の罰が前日から一転して厳しかったのも道理です。

「脚を開きなさい」

半ば期待……では、断じてありません。覚悟していた通りのことを命じられて、胸がどきどきしました。

畏れ多いことに、牧師様が私の前に跪きました。

ラビアを掻き分けられて淫魔のペニスが露わになります。押し潰さない程度の力できゅっとつままれて、あわあわとしごかれます。

「くうう……んん」

あまり痛みはありません。あったとしても、それに数十倍する快感です。胸の痛みなんか忘れてしまいます。淫魔が侵入しようとしているのでしょう。内腿まで垂れてきたのがリンパ液か淫らな汁か、もう分かりません。

くりんと莢を剥かれて、中身の先端に近いあたりに太い糸が巻き付けられました。

「はあああ……」

こんなので魔封じになるのでしょうか。淫魔を助長しているのではないでしょうか。

牧師様が背広の内ポケットから十字架を取り出されました。女の人がネックレスにするような小さな十字架です。

その横木の両端に、淫魔のペニスから垂れている糸の端が結わえられました。

「くううっ……」

淫魔のせいでしょうか。十字架があり得ないほどに重たく感じられます。純粋に痛いです。

牧師様は、ここにも聖水を塗り込めます。

くすぐったいです。すぐに熱くなってきて痛くなってきて……ヴァギナの奥から熱い滴りがあふれます。牧師様はお気づきのはずですが、何もおっしゃいません。

「いつもの服を着なさい。ただし、一切の下着をつけてはいけません。淫魔が下着と上着との隙間に身をひそめるといけないから」

そういうものでしょうか。一切ということは、シュミーズだけでなくドロワーズもです。ドロワーズを穿けば十字架が持ち上げられるので、かなり楽になると期待していたのに。でも、牧師様の御指示には逆らえません。

いつもの服というのは、晴れ着のワンピースです。まだ夏向けのもので良いでしょう。ふだんの夏の服装より露出は少なくて、同じ半袖でもスカート丈は膝下三インチです。蒸れますから、ドロワーズを穿かないとちょうど良いかもしれません。不謹慎です。

それを着て、小さな十字架を首に掛けます。装飾品ではなく、純粋に信仰の証しの素朴な木製です。淫魔のペニスに吊るしたのより、ずっと軽いです。

すでに礼拝堂には二十人ほどの信者が集っています。定刻までには、百人くらいになります。朝昼晩の三回で三百人から四百人です。千人の人口のうち、どうしても朝から晩まで用事のある人はともかく、新生児を連れての参加も可能なのですから――参会者は人口の半数にも満たないと嘆くべきか、三分の一以上は熱心な信者だと喜ぶべきか。

それはともかく。牧師様は住居と直結している通用口から私より遅れて入場されます。外への出入口から入場した私に、二十人の視線が注がれます。礼拝堂の中が騒がしいはずもありませんから、ひそひそ話も耳に入ってしまいます。

「今日のジュリアちゃんは、いつも以上にお淑やかね」

「なんか、色っぽい表情だぜ？」

「まさか、誰かにやられたかな？」

ふつうに歩くと十字架が揺れて淫魔のペニスを刺激するので、所作が控えめになります。がに股で歩くなんてみっともないですから、せめて揺れを減らそうとして十字架を膝の裏側に当てるようにすると、内股で歩く形になります。そうすると、必要以上に腰を振ってしまうのです。

もしかすると下着を着けていないことまで気づかれはしないかと、わずかな距離を何百ヤードにも感じながら、信者席の最前列に辿り着きました。座るときに裾を押さえるのは当然ですが、十字架が椅子に当たって音を立てないようにふつうよりずっとゆっくり座りました。それで、かえってお尻の形をあからさまに見せ付ける形になったとは、座ってから気づきました。

座ると十字架の重みが消え失せますから、かなり楽になりました。脚は開き気味にして、腿が十字架に触れないようにしています。

ですが、座ったきりではありません。聖歌のときは説教壇の横にあるオルガンまで行かなければなりません。パイプオルガンなんかじゃなくて、足踏式です。足を動かすと、十字架も動いてしまいます。それに、オルガンの音が振動として伝わってきて、淫魔のペニスだけでなく、そちらに気を取られて忘れかけていた乳首もつらくなってきます……嘘はいけませんね。羞ずかしいのですが、痛みと快感とがせめぎ合って、淫らな汁がこぼれます。お尻のところに染みが出来ませんように。そう祈らなければならないほどです。

参会者に気取られてはいけない。そう思うと、胸がぎゅっと締め付けられます。ばれてしまったらと怯えると、何故か腰が疼きます。きっと淫魔が入り込もうとして、淫らな妄想を囁いているのでしょう。負けてなるものですか。

午前の礼拝式は、なんとか乗り切りました。封印を解いていただいたのですが、乳首に巻いたヒューズの針金が、両方とも外れていました。布に巻かれていたから、元の位置に残っていただけのようです。

「ふむ……もっと工夫しないといけないね。なにしろ、私はずっと以前に牧牛の悪魔祓(エクソシスト)いを

した経験があるだけで、人間それも淫魔を相手にするのは初めてなのです。ノートン先生の指導があっても、なかなかです」

失敗の言い訳をするなんて、牧師様らしくありません。娘を気遣う父親だからでしょうか。

普段着に着替えて、昼ご飯の支度です。朝のうちに下準備はすませてあるから、手早く出来上がります。今日はボブさんが手伝いに来てくれていますけれど、三人分しかテーブルに並べません。

「食欲が無いので、お部屋で休んでいます」

部屋へ逃げ込むと、父様が入って来ました。

「おいたをしてはいけないよ？」

するはずがありません……と断言できないのが悲しいです。だって、乳首も淫魔のペニスも、じんじんしています。

「そこに腰掛けなさい」

レース編みや書き物をする小卓の前の背もたれ付きの椅子。そこに腰掛けると、父様（それとも牧師様？）は、私の腕を背もたれの向こう側へねじって、後ろ手に縛りました。抗議どころか、抗って物音を立てることすら憚られます。だって、それぞれの部屋には鍵なんか備わっていません。ドアの向こうにはボブさんとジャックが居ます。

両脚を開いてスカートを太腿までめくられて膝の上を椅子の角に縛られるときも、一秒でも早く終わってくれることを祈るだけでした。

居間とひと続きの食堂で三人が食事をしているかすかな気配や小さな話し声に注意を集中して、淫魔の囁きには耳を貸さないようにしていました。

いつもよりは早く、三人は食事を終えました。すぐに父様が、ボブさんを伴って部屋へ入ってきました。

金曜と同じように、ぽかんと口を開けて目を丸くしているボブさんの前で、父様は私の縄をほどきました。そして、私には礼拝式のときに着るワンピースを持たせて礼拝堂へ―

―連行という言葉を使いたくなりました。

すべての出入口に鍵が掛けられて、私はうろたえるよりも不安になるよりも、諦めました。

「全裸になりなさい」

服を脱げというよりも、よほど直截な言い付けです。いえ、牧師様の御指示です。

またボブさんに裸を見られるんだと思うと、羞ずかしさに気が遠くなりそうです。なのに、淫魔が憑りつきやすい突起はすべて固くしこって、ヴァギナが熱く潤います。

もう何も考えずに、牧師様のお言葉に従います。

ボブさんは（多分ですが）私よりも顔を赤くして、そっぽを向きながら、ちらちらとこちらを盗み見しています。

牧師様は、そんなボブさんをこき使います。

「ここに立って、針金を持ってください」

電気の糸ヒューズではなく、菜園で使う十六番手の針金です。

前にショットガンの銃口径も番手（ゲージ）で表現しましたけれど、まったく別物です。ショットガンは、銃口と同じ直径の弾が何個あれば一ポンドの重さになるかで表わします。二十番なら二十個の弾が必要ということです。針金は、一インチをその番手で割った数字が直径です。どちらも番手が上がると細くなるのは一緒です。

牧師様は、その十六分の一インチの針金の途中を細い棒にひと巻きして、小さなを輪お作りになりました。私の胸と見比べながら、もうひとつ。

二つの輪が、それぞれの乳首に通されました。

ボブさんに乳首をつまませておいて、輪の両側を引っ張ります。父様とお医者様（ああ、ジャックもでした）以外の男性に裸の胸を触られるなんて、生まれて初めてです。でも、羞ずかしいと思う余裕もありません。輪がじわっと引き締まります。乳首が痛いです。ミントの強い刺激で腫れているので、なおさらです。

両方の乳首を針金の輪で縊ると、輪と輪の間の針金をペンチでねじって、乳首の自然な

間隔に合わせます。そして――長い針金を胸にひと巻き、ふた巻き。乳房が、ぼこぼこにひしゃげます。すごく痛いです。

　またミント入り聖水を乳房全体と乳首にも塗っていただいてから、胸を布で包みました。針金でひしゃげた凸凹は目立たなくなりました。

「朝は淫魔のペニスにばかり気を取られて、肝心のことを忘れていました」

　牧師様が、唐突におっしゃいます。

「何よりも、淫魔は身体に開いた穴から入り込むのです。人妻であれば簡単に穴をふさげますが、処女には困難です」

　ヴァギナに栓になる物を挿入するのだろうと、私にも見当がつきます。でも、そんなことをされると、純潔を失ってしまいます。

　牧師様は針金を四つ折にして、ボブさんに手伝わせて撚りを掛けました。四本を折り返した屈曲部から一フィートくらいのところでさらに丸めて、そこから先は撚りを掛けずに二本ずつに分けました。

「……？」

「……？」

　牧師様が何をされるお積りなのか、さっぱりわかりません。ボブさんも、きっと同じです。なんて呑気なことを言ってられなくなりました。その針金の束を股間に通されたのです。

　牧師様が針金の両端を持って、私を吊り上げようとします。針金がU字形に曲がって、丸めた部分がラビアを割ってヴァギナに食い込んできます。

「くうう……痛いです」

　でも、鞭打ちに比べれば鈍い痛みです。淫魔が入れないように身体の穴をふさいでいただいているのだから、やめてくださいとも言えません。

　丸めた部分から先は針金が二筋に分かれて、ラビアを圧迫しながら鼠蹊部に沿って引き上げられ、Y字形になった先が腰を巻きました。後ろで、針金が曲げられた部分の中を通

ってクロスして、さらに前へ巻かれます。おへその下で左右の針金が撚り合わされて、先端が肌を傷つけないように前へ曲げられました。ヴァギナには丸い部分が食い込んでくるし、アナルも四本の針金で縦に割られた感じです。それだけでも、じゅうぶんにきついのに。部分部分をペンチでねじられて、さらに引き締められます。

これだけ厳重に針金を巻き付けられても、淫魔のペニスは逆三角形状になった輪郭の中で息づいています。そこは、朝と同じように莢を剥かれて太い糸が巻き付けられます。そして、重たい十字架を吊り下げられました。

「これで、淫魔が付け入る隙は無くなったでしょう」

そうかもしれませんが。こんな状態で二回の礼拝式を務められるとは思えません。でも、努めなければならないのです。礼拝を怠れば、たちまち淫魔に付け込まれるでしょう。

歩いている姿を他人に見られたくないので、わたしはすぐに礼拝堂へ行きました。一歩ごとに股間に針金が食い込んできます。ことに、丸めてクレバスの奥に食い込んでいる部分は圧倒的な異物感です。ラビアもアナルも針金にひしがれて痛いです。そこに、淫魔のペニスへの刺激が加わります。出来るだけ脚を動かしたくないので、がに股になって、コンパスで地図の距離を測るみたいに、体幹をひねって進みました。

一歩一歩が拷問です。でも、ずっと昔のクリスチャンの一派は、修行のために自身の身体を鞭打ったりして苦しみを与えていたといいます。これも、そうなのでしょう。プロテスタントとカソリッククは、互いに相手を悪魔か蛇蝎のごとく憎み合っていますけれど、神の教えに違いは無いのではないかと――無知で無学な私は、素朴にそう考えます。

さいわいに礼拝堂にはまだ誰も来ていなかったので、無様なよちよち歩きで席に辿り着きました。神様には見られていたわけですけれど、神様は常に人間の行ないをご覧になっているのですから、今さらです。

礼拝式が始まってからが、真の試練でした。立ったり跪いたりするたびに、股間が締め付けられます。苦痛が跳ね上がって、その奥から淫らな快感がにじんできます。お祈りの言葉を（いつもと同じにはっきりと）口にするたびに、胸が締め付けられ乳首が痛みます。

オルガンのところまでのわずか十数歩がいちばんの苦行です。けっしてがに股にならないように気をつけながら、脚を交互に踏み出す。それが、これほど困難だと思ったことはありませんでした。途方もない苦痛だというのに乳首が疼き淫魔のペニスが震え、ヴァギナの奥に熱いうねりが生じます。これは淫らな快感ではなく、困難を克服する悦びです。ええ、そうですとも。

頭に霞が掛かって何も考えられなくなっても、礼拝式の順序は身体が覚えていたのでしょう。衣服の下に隠された魔封じに気づかれることもなく（と、思います）礼拝式は無事に終わりました。信者の皆さんが退出されてから、私も立ち上がったのですが。

「ジュリアは留まって、神様にお祈りを捧げていなさい。礼拝堂から出るのは、用を足すときだけにしなさい」

用を足すって……ああ、不可能ではありません。針金は股間の前の部分でＹ字形に拡がっています。その間から迸ることでしょう。もっと時間の掛かる用足しは、今のところまったく必要ありません。

でも、ここから出ないことにしました。針金を外してもらって休めるのならともかく、ずっと着けたままでいるのなら、わずかでも身体を動かすのは嫌です。

私は跪くのはやめて、できるだけ楽な姿勢で座ったまま（神様、お赦しください）両手を組むだけにして、お祈りをしました。

神様。どうか私から淫魔を遠ざけてください。追い祓ってください。

神様。強い意志で淫魔の囁きを排除できるよう力をお貸しください。

神様。このようなつらい試練を課してくださったことを感謝します。

神様。もっともっと苦しい修行を……なんでもないです。

アーメン。

礼拝式と同じ長さの一時間半は、ちっとも休憩になりませんでした。じっとしていると、激痛ではない程度の痛みが、胸と股間を嬲り続けます。淫らな快感も下火にはなりますが、完全に消え失せてはいません。じわじわと全身が熱を帯びていく感じです。

夕方の礼拝式が始まったときには、昼の礼拝式が終わったときよりも意識に霞が掛かっていました。内腿は淫らなリンパ液で濡れそぼり、薄青色のワンピースの後ろには染みが目立っていたかもしれません。でも、それを気にする余裕はありませんでした。

身体だけが機械仕掛けみたいに動いて――我に返ったのは、胸を強くつかまれたときでした。とっくに礼拝式は終わって、礼拝堂の中には私と牧師様とボブさんの三人だけになっていました。電気代の節約のために、豆電球しか点いていません。

「うむ。淫魔が入り込んだ形跡はここには無いようだね」

もっとも肝要な部分は後で調べると、牧師様はおっしゃいました。

私が満足に歩けないと分かると、ボブさんが背負ってくれました。それはそれで胸が針金に圧迫されるし、脚を思い切り拡げられて股間にも針金が食い込んでくるのですが……苦痛を感じる神経だけが麻痺してしまったのか、淫らな快感ばかりが強くなってしまいました。呻き声は、歯を食いしばって抑えましたけれど。

――相変わらず食欲はありませんでしたが、育ち盛りの娘が二食も抜くなんて不健康です。頑張って少しだけ食べました。

あ……魔封じは解いてもらっています。でも、落ち着いて考えると、逆なような気もします。神様が降臨なさっている礼拝式の間だけ魔封じをしているというのは。それとも、神様が傍にいらっしゃるという安心が、悪魔の付け込む隙につながるのでしょうか。そういった事柄もしっかり教わって、立派な修道女になりたいと思います。

晩ご飯が終わってボブさんが家へ帰って。父様がジャックに言い付けました。

「今夜もジュリアのために特別な儀式、聖礼典（サクラメント）を執り行なう。決して礼拝堂に近づくなよ。この前の鞭くらいではすまさんぞ」

ジャックは震え上がって、家でおとなしくしていると誓いました。でも、私と父様をうたぐり深そうに見比べています。

他人の目はともかく、常に接しているジャックには 、もしかすると魔封じの仕掛に気づかれているかもしれません。また父ちゃんが姉ちゃんを虐めるんじゃないかと心配してく

れているのでしょう。

　でも、これは神様の御業で悪魔を斥けていただく聖なる行為なのです。弟も、それを理解してくれると良いのですが。

　礼拝堂までは、父様が私を横抱きにして運んでくれました。抱っこされるなんて、何年ぶりでしょうか。

　牧師様は聖壇からすべての祭具を下ろして毛氈も取り払いました。

「ジュリア・コバーニ。全裸になって、聖壇に横たわりなさい」

　一日に三度も裸になるなんて。

　しかも聖壇に身を横たえる。旧約聖書には動物を神様への生贄に捧げるという記述があります。それになった気分です。

　牧師様は私の両脚をつかんで、持ち上げながらＶ字形に開きました。正面に立ってらっしゃるから丸見えです。ボブさんならともかく父様ですから、そんなに羞ずかしくありません。

　さらに深く折り曲げられて膝が頭を挟み、つま先が聖壇の天板に着きました。

　牧師様は私の右足と右腕だけを重ねて押え付けて、縄で括りました。左足と左手も同じようにしました。

　私は百八十度に前屈して手足を広げて縛られ、そのまま裏返された形です。股間が真上を向いて、牧師様からはヴァギナの奥まで見えていることでしょう。どころか、アヌスまで。

　牧師様は背を屈めて、もろに真正面から私の股間を間近に覗き込みました。

「ふうむ？」

　息がクレバスに吹き込んできます。淫らなリンパ液がにじんでしまうようなくすぐったさです。

「痛っ……」

　ぐりっと抉られました。私のよりずっと太い指です。ヴァギナの縁を強く擦られると、

痛さとくすぐったさとが同時です。
「礼拝式のときの様子では、まさに淫魔がジュリアの身体を乗っ取ろうとしていたね。やむを得ません。もっとも強力な魔封じを施します」
　牧師様がシャツとズボンを脱ぎました。下は、胸元から膝までが一体となったロングジョンです。それは脱がずに、股間の開閉部からペニスを引き出しました。というより、窓を突き破って姿を現わしました。ええ、びっくりするほどに巨大で遠距離射撃の体勢になっているのです。想像していたより、ずっと獰猛な印象です。
　まさか――というより、そんなことがあり得るなんて想像も懸念もしていなかったことが、現実になりかけている。そう直感しました。
「父様。まさか、私と番(つが)うおつもりでは……ないですよね？」
「もちろん、違うとも」
　そう言いながら（ベッドにするには）狭すぎる聖壇に上がって来ました。私を跨いで膝を突いて、今にも転げ落ちそうです。
「この神様に祝福された聖なる肉棒で、淫魔の通り道をふさぐのです」
「でも、それって……男女が行なう交わりの営みと同じです。子作りを目的としない交わりは、聖書でも戒められています」
　牧師様のお言葉に逆らったのは初めてです。父様に本気で言い返すのも何年ぶりかです。
　牧師様は私の顔の横に両手を突いて、じっと私を眺めています。性急に事を進めようとはなさいません。それに勇気づけられて私は、決定的と思える事実を指摘しました。
「だいいち、私たちは親子です。血のつながりは無くても……私の母様は、私を父様に託したのでしょう？」
　言っているうちに不安になってきました。もしかして、そういう目的で、ずっと育てて……そんな馬鹿なことがあるはずがありません！
「人間が人間の肉を食べるのは、悪いことかね？」
「えっ……？」

いきなり関係の無いことを尋ねられて、切迫した状況も忘れてきょとんと……したのは一瞬でした。きっと聖餐式のことをおっしゃっているのです。

「取って食べなさい。このパンは私の肉である」

私はマタイ伝の一節を暗誦しました。

「でも、あれは象徴です」

「つまり、嘘だというのかね？」

鞭打つような声です。

「そんなこと、言ってません。でも、実際と象徴とは……」

「では、キリスト様が復活なされて、腕の肉を削いであなたに与えようとされたら、拒むのですか？」

「それは……」

「象徴といえども、それは実際と同じなのです」

象徴が虚偽か真実かと尋ねられれば、真実と答えますけれど。

「人間が人間の肉を喰らうことが絶対に正しい場合もあるのです。同じように、子作りを目的としない肉体の交わりが大きな正義に通じるときもあるのです。実の父と娘であってもです。まして、養い親と養い子であれば、なおさらです」

「……」

神学論争で、修道女志望の小娘が牧師様に太刀打ちできるはずがありません。

「これは、厳密には男女の交わりではない。淫魔から身を護る聖礼典なのです」

釈然としませんけれど、納得するしかないのでしょう。こんなふうに縛られていては、抵抗しても無駄です。救けを求めて叫んでも、誰にも届きません。

いえ……父様に逆らうなんて、したくありません。誰かが救けに来てくれても、こんな羞ずかしい姿を見られたくないというよりも、父様の醜い行ないを見られたくありません。

その考えが間違っているのです。これは淫らな行為ではないと、牧師様がおっしゃるのです。信じます。

心が落ち着いてくると――限界を超えて曲げられた腰と背骨の痛みが襲ってきました。でも、乳首や淫魔のペニスに加えられた激痛に比べれば、まったく平気です。

「神よ。ジュリア・コバーニに祝福を。淫魔よ、この娘の身体から疾く立ち去れ」

掌を上にして中指をヴァギナに突き立て、神父様は中で何度も何度も十字を切りました。そのたびに、針で引っ掻かれるような軽い痛みが奔って、同時に甘い電気が流れます。

コバーニなんて他人行儀に呼ばれたくない。「この娘」ではなく「我が娘」と呼ばれたい。ふっと、そう想いました。もしかして私は……自分でも気づかないうちに、家族としてではない愛情を、父様に向けて育んでいたのでしょうか。

でも、それは。たとえ血はつながっていなくても、背徳です。そういった不純な恋慕も、この聖礼典で浄化していただけるでしょうか。

父様が指を引き抜きました。いっそう深く、私にのしかかってきます。

ちょっと顎を引くと、私の下腹部がすべて見えています。ジャックのがピストルだとすると大砲みたいなのが、私のクレバスを割って……

「痛いっ……！」

びききききっ……と、股間を真っ二つに引き裂かれたような激痛が奔りました。

ああ……これで私は純潔を穢された。いいえ、神様に祝福された肉の棒によって聖別されたのです。

父様が腰を上下に大きく揺すり始めました。

最初の激痛はそのままに、ヴァギナの中で鈍い痛みがうねります。神様の祝福が、身体全体に沁み込んでいく――そう考えるようにします。

つながったまま、父様が上体を起こしました。両手で私の乳房をつかみます。優しい力で揉みながら、親指の腹で乳首を転がします。

「あんんっ……」

祝福への悦びが乳房からにじみ出て乳首へと集まります。親指に擦られるたびに、火花が飛び散ります。

意識に霞が掛かってきました。淫らなピンク色ではありません。淡い黄金色に輝いています。

父様は乳房を揉みながら、腰の動きを再開しました。さっきとは別の角度で突かれて、痛みの感じ方も変わってきました。痛いのに、それが悦びでもあります。

そうして、夢うつつのうちに何分か、もしかすると何十分かが過ぎました。

「くはっ……」

父様が苦しそうに息を吐きました。なのに、腰の動きは激しくなっていきます。右手が乳房から放れて指がお腹を滑り降りて……ラビアを掻き分けます。

「あっ……？！」

淫魔のペニスをつままれて、それまでとは比較にならない強い電気が奔りました。

「聖汁を注ぐぞ。淫魔よ、消え失せろ！」

「ぎぴいいぃっ……！」

激痛が爆発しました。淫魔のペニスに爪を立てて抓られたのでしょう。それとも、神様の御業に滅ぼされようとしている淫魔の断末魔なのでしょうか。

父様が腰の動きを止めました。

ずぬううっと、肉棒が引き抜かれる感触がありました。痛みが、すうっと軽くなりました。でも、ヴァギナも淫魔のペニスも、ずきずきと疼いています。

父様は聖壇から降りて、身繕いをしました。それから、ハンカチで私の股間を拭ってくれました。ハンカチが赤く染まりました。

こうして、私の肉体にある淫魔の通路には結界が張られたのでした。

――夜はX字形磔はもちろん手を軽く縛ってもらうこともなく、眠りに就きました。聖礼典の御利益でしょう、淫魔の囁きも聞こえませんでした。

そのかわり、聖礼典のことばかりが頭に浮かんで、なかなか寝付けません。あんな太い肉棒が私の中に入っただなんて、実際に体験したことなのに、股間の重たく鈍い疼きが証拠だというのに、信じられない思いです。

もしかして、魔封じの効き目には期限があるのでしょうか。そうだとしたら、あの儀式を定期的に繰り返す必要があるのかもしれません。そうだったらいいな……なんて、ちょっぴりだけ思ったりもします。これは断じて、淫魔の囁きではないはずです。

連日の寝不足と今夜の衝撃とで、心が消耗しきっていたのでしょう。寝付けないなんて言いながら、いつの間にか眠りの中へと引きずり込まれていました。

魔女の嫌疑

月曜。数日ぶりの爽やかな目覚めでした。もう、淫魔が囁き掛けてくることもないでしょう。生まれ変わったつもりで、新たな一週間に臨みます。

……でも、だめでした。淫魔の囁きは聞こえてこないけれど、まだ続いているヴァギナの疼きが、聖礼典のことばかり思い出させます。儀式の意義を考えるのではなく、父様のペニスが私のヴァギナに突き刺さったという事実と、それに伴なう激痛と、にじみ出てきた悦びと。そんな淫らなことばかりが。

気もそぞろに一日を過ごしました。レース編みは、今日も手に付きませんでした。

そして夜はベッドの中で……またしても淫魔の囁きに負けてしまったのです。

それも、これまでのようなおいたではすみませんでした。父様によってつけていただいた道には、指が三本も入ってしまったのです。きついし痛みもありましたけれど、快感のほうが上回っていました。

肉棒を中で動かされながら淫魔のペニスを抓られたときの甘い激痛を思い出して……右手の人差し指から薬指までを挿入して、親指で淫魔のペニスを刺激しました。左手が空いているので、指をうんと広げて左右の乳首を同時に擦りました。

「あああああっ……だめえええっ！」

慌ててシーツを口に詰め込みましたが、時すでに遅しです。父様もジャックも熟睡して

いることを願うしかありませんでした。

もしも父様の耳に届いていなかったとしても、知らん顔で通すほど、私は厚顔ではありません。牧師様にお願いして、礼拝堂での朝のお祈りに立ち会っていただきました。

牧師様は私を責めるでも諭すでもなく、けれど赦しの言葉も掛けてくださいませんでした。その代わり、予想外の――本来なら喜ばなければならないことをおっしゃいました。

「もう思い悩むことはありませんよ。今日の午後にも、教区長のアンディ・ノートン牧師が来てくださいます。これまでの経過は電話で報告してきたのですが、私ひとりでは困難だろうと判断されて、直々に悪魔祓(エクソシスト)いをしてくださることになったのです」

牧師様の顔にも声にも悔しさがにじんでいます。牧師でありながら娘を淫魔から護ってやれなかった父親の無念でしょうか。

私にも父様の憂鬱が伝染したのでしょう。ちっとも安心出来ずに不安が募るばかりでした。

ノートン教区長様がいらっしゃったのは午後二時でした。大きな馬無し馬車で、教区長様は（聞くところによるとご自分のお歳の半分の）若い奥様を同伴なさっていました。助手の牧師様と馬無し馬車の運転手さんも一緒です。

御挨拶もそこそこに、父様を含む四人の男性は、馬無し馬車の荷台に積んできた様々な道具を礼拝堂に運び入れる作業に取り掛かりました。私と（付け足しに）ジャックは、奥様の接待です。といっても、コーヒーとクッキーをお出しした後は、居間の隅っこに控えて、奥さまが読書をなさる邪魔にならないようにおとなしくしているだけでしたけれど。

奥様は社交的でないのか、子供（悔しいけれど、奥様からみたら、私はじゅうぶんに子供でしょう）の相手が苦手なのか、私たちにあまり話しかけてはくださいませんでした。

ただ、いくつか教えていただいたひとつが、奥様も悪魔祓いに立ち会われるとのことでした。

私は、とても心強く思いました。だって、これまでにされたことといえば、羞ずかしいことばかりでした。女性が立ち会えば、そんなにひどいことはされないでしょう。でもそ

れでは、悪魔祓いの霊験も薄れるのではないかしらと――矛盾した不安に苛まれたりもします。

晩ご飯の支度は六人分しか調えなかったので、ぎりぎりテーブルに載りました。

「ジュリアは食事をせず、礼拝堂でお祈りをしていなさい」

罰でも信仰の証でもなく……夜になってから、教区長様によって行なわれる私への悪魔祓いは肉体的にとても厳しいので、嘔吐などをして場を穢さないための予防処置だそうです。

そう聞かされただけで、私は心の底から震え上がってしまいました。でも……どんなふうに虐められる／訂正します／清められるのだろうと、想像すら出来ない事柄を想像すると、腰の奥に熱い疼きが生じます。この不合理な感情は、淫魔がもたらすのでしょうか。

そんな得体の知れない恐怖は、礼拝堂に入るなり、具体的な恐怖に変わりました。そして、腰の奥の疼きがいっそう熱を帯びてきました。

馬無し馬車の大きな荷台に積まれていた荷物が、すべて礼拝堂に運び入れられたのでしょう。実際に人間を磔に掛けられる大きな十字架が、聖壇の前に立てられています。天井には大きな滑車が幾つも吊り下げられて、太い鎖が垂れています。一本の鎖の下には、行水桶ほどの差し渡しで、立ったまま腰まで浸かれそうな桶が据えられています。幅の広い頑丈そうな梯子が、床からニフィートの高さで水平に支えられています。断面が三角形をした太い木材が、四本の脚で支えられています。これは……父様の本棚にある、聖書研究の専門書の挿絵とそっくりです。中世の魔女裁判、あるいは異端審問の拷問道具です。

そう思ってさらに見回すと、肉を挟んで引き千切る大きなペンチとか、火桶と焼鏝とか、いろんな大きさと形の木枷や鉄枷も、幾つかの木箱に収められています。隅へ寄せられた信者席の上には、長短様々な鞭や笞が置かれています。

なんてことでしょう。これらの拷問道具はすべて、私に使うために持ち込まれたのです。

私は恐慌に陥って、出入口へ駆け寄りました。でも、そこで立ち止まりました。ここから逃げ出しても、私には行くべき場所がありません。家へ戻って問いただしても（何を問

いただすというのでしょう）どうにもなりません。むしろ、ジャックまで何らかの形で巻き込んでしまいます。

逃げてどこかへ隠れてみても、狭い町です。簡単に見つかって連れ戻されるでしょう。町の人たちにも知られてしまいます。それよりも。私から淫魔を退けるための聖礼典を拒んで逃げるなんて、淫魔をみずから進んで迎え入れるようなものです。

私はこの場に留まって。可能な限り厳しい試練を与えてくださるよう、神様にお願いするべきなのです。そう決心しました。すると……腰の奥に熱い疼きが脈づき始めたではありませんか。淫魔の仕業でしょうか。私が淫らな真似をするだけでなく、私が苦しむのも、淫魔の喜びなのでしょうか。

どうしようもないので聖壇の前に跪いて両手を胸の前で組みました。でも、お祈りの言葉を唱えるどころか、頭に浮かんですらきません。

そのうちに、恐怖への好奇心が頭をもたげてきます。

まずは、すぐ後ろに立ててある十字架。犠牲者の足を載せるための手前に傾斜した踏台がありません。その代わりと言ってはなんですが、ずっと高い位置に、Ｆの文字を左へ倒したような棒が突き出ています。腕木の位置から推測して、腰のあたりです。

一昨日の私だったら、上向きに突き出ている二本の棒の意味に気づくとしても、しばらくは考え込んだことでしょう。でも今は、見た瞬間に理解しました。と同時に、アヌスもヴァギナと同じ用途に使えるらしいという新たな知見も得ました。男女共通の器官。ソドムの罪とはこういうものだったのですね。

十字架は、なんといいますか、ただ飾られていたのではなく、実際に使い込まれた感じに古びています。それだけ頻繁に悪魔祓いが行なわれているのでしょう。でも、上向きの棒が二本ということは――つまり、女性を辱める／訂正します／清めるための聖具なのです。男性用の十字架もあるのでしょうか。

考えても答えの得られない疑問は考えません。別の大道具を観察しましょう。

ずっと気になっていた三角の材木。作業台には使えないし、刈り取った麦を乾燥させる

には風通しが悪そうです。あら……中程の先端にどす黒い染みが。まさか、血痕？

背筋が凍りつきました。淫魔封じの針金と、一昨夜の出血からの連想です。もしも、これに跨ったりしたら。鐙は無いし、馬の腹よりもつるつるしていますから腿で締め付けても体重を支え切れないでしょう。

「きゃっ……？！」

無意識に後ずさっていたのでしょう。つまずいて転びかけました。

もう、好奇心なんか消え失せました。それに……これらは私に使うために、教区長様がわざわざ持ち込まれた道具類です。観察して推測しなくても、すぐにでも使い方と恐ろしさとを、私自身の身体で知ることになるでしょう。

私は聖壇の前へ逃げ戻って、全身全霊でお祈りをしました。

神様。私をお護りください。

でも……神様が加害者ではないでしょうか。絞首刑の執行者に命乞いをしても無駄なのではないでしょうか。

絶望です。それなのに……十字架に磔けられてヴァギナもアヌスも串刺しにされたら、苦しいだけだろうかなんて、とんでもない妄想が湧いてきます。三角の材木に乗せられたら激痛に泣き喚いて、さすがの淫魔も辟易して逃げるのではないかしらなんて、ちょっぴり期待したりもします。

ああ……住居に通じるドアの開く音です。いよいよ、私への凄絶な聖礼典が始まるのです。

父様が先導する形で、教区長様と奥様、助手の牧師様。その後ろは運転手さん――でもボブさんでもありませんでした。町長のディーラーさん、銀行頭取のギャレットさん、保安官のハーベイさん。町の名士様ばかりが三人も。

それにしても、奥様はなんという服装をしてらっしゃるのでしょう。長袖のブラウスに細身の乗馬ズボン。乗馬ズボンとすぐに分かったのは、歯車状の拍車が付いたブーツを履いているからです。ズボンはぴっちり肌に密着して、脚もお尻も生の輪郭が浮き彫りにな

っています。淫らです。もっと淫らなのがブラウスです。ボタンを留めずに、裾をおへその上で結んでいます。余った端がリボンみたいでお洒落ですが、おへその露出くらいは、この服装の中では些末事です。胸元が開いて、乳房が半分くらいは見えています。

男性の皆様は、それぞれの職業にふさわしいセミフォーマルな装いです。

その皆様が、父様と奥様を除いて、私を取り囲みました。私は立ち上がるタイミングを失って、跪いたままです。

「これより、ジュリア・コバーニの魔女審問を行なう」

教区長様が厳かな声で、とんでもないことをおっしゃいました。

「魔女審問って……悪魔祓いではないのですか？」

抗議の意味を込めて尋ね返しながら、心のどこかでは――ああ、やっぱりと思いました。それで、ここにある恐ろしい拷問道具の説明がつきます。

「これまでの魔封じの失敗は、すでにお前の体内に淫魔が巣食っているからではなかろうか――というのが、ノートン先生のお見立てなのだよ」

父様が優しい声で、これも恐ろしいことをおっしゃいます。

どうでもいいことですけれど。ここには牧師様が三人もいらっしゃいます。区別するために、牧師としての発言であっても父様と考えることにします。

「立て。立って、衣服を下着まですべて脱いで全裸になるのだ」

教区長様が、懇切丁寧に無慈悲なことをお命じになります。

「あの……この方たちは？」

魔女審問だろうと悪魔祓いだろうと、町長さんたちは部外者です。

「魔女審問は、私と妻のフェビアンヌ、ベルケン牧師とヒュンケル牧師の四人で執り行ないます。他の三人は証人です」

これから行なわれることは、外形的には暴力行為であり強姦だと、教区長様は明言なさいました。ですが、それは神様の絶対的正義の下に行なわれる私の救済なのです。だから犯罪ではないという証明のために立ち会ってくださるのだそうです。

私としては羞恥が募るだけです。

「もっとも。彼らにも幾分かは手伝ってもらって、いずれはヒュンケル牧師と彼らだけで魔女審問や悪魔祓いを出来るようになってもらいます」

つまり、この場にいる全員が私を拷問に掛けるという意味です。

「納得できたところで、さっさと全裸になりなさい」

納得なんて出来ません。でも、拒んだらどんな目に遭わされるか、身体を張って確かめる蛮勇などありません。それに、奥様はグラマラス過ぎて、むしろ私のほうが……なんでもないです。

私は立ち上がって、取り囲んだ人たちの視線に怯えながら、最初に頭のスカーフをほどき、それから晴着のワンピースを脱ぎました。シュミーズもドロワーズも。最後に、胸の布をほどきます。

「そこの台に仰臥しなさい」

そこの台というのは、両端と真ん中を脚に支えられて水平に寝かされた梯子のことです。今さら恥部を隠しても無意味ですから、両手を使って足も大胆に動かして、床からニフィートの高さにある台に上がりました。

教区長様とベルケン牧師様とが、台の両端に立たれて――私の手足をニフィートほど広げて、そこに置かれてある、二本の長い鎖につながれた木枷に嵌めました。そして、ベッドの端に取り付けられているハンドルを回すと――木枷が引っ張られて、私の身体も引き伸ばされます。でも、両手で木からぶら下がった（初潮を迎えてからは、そんなお転婆は慎んでいます）くらいまで引っ張られたところで、ハンドルは止まりました。

「このまま引っ張り続けると、肩を脱臼して股関節まで破壊されますが、拷問が目的ではないので、身動きできなくなったところで止めます」

拷問ではないというお言葉に、ほっとしました。では、そんなに痛いことはされずにすみそうです。羞ずかしいのさえ我慢すれば良いのです。

「さて。悪魔は人間の身体に契約の印を刻むことで、その身体を乗っ取ります。それが無

いうちは一時的に憑りつかれたとしても、悪魔祓いによって、その者を救えるのです」
　教区長様が立会人の皆様に講釈されます。
「契約の印は痣や黒子（ほくろ）、疣などに偽装されていますが、そこは痛みを感じなくなっています。したがって……」
　ベルケン牧師様が、皮革で装丁された薄い本のような物を開きました。立会人と父様に見せてから、私にも見せ付けます。
　太いのや細いの、長いのや短いの――何十本もの針が、びっしりと並べられています。
「この針を怪しい箇所に突き刺して、痛みを訴えない箇所があれば、即ちそこが、契約の印なのです」
「全身にですかい？」
　うんざりしたような声で尋ねたのは、保安官のハーベイさんです。
　私はうんざりどころか、恐怖に震え上がっています。
「そうするときもありますが、ヒュンケル牧師の観察で、相手は淫魔だと判明しています。淫魔が契約の印を刻むのは、淫らな部位に限られているのですよ」
「つまり、股座とか乳房かね」
　これは町長様の質問ですが、保安官とは反対に、声が弾んでいます。手間が省けて嬉しいのでしょう。
　もっとも敏感な部分ばかりに針を刺される……私は気が遠くなりそうです。
「では、私が手本を示します。もっとも怪しい箇所からです」
　教区長様が、淫魔のペニスを掘り起こしました。
「待ってください！」
　誤って指先に針を突き刺しただけでも痛いのに。こんな敏感な突起に刺されたら……
「そこは淫魔のペニスだと、父様は教区長様から教わったそうです。針で確かめなくても、証拠は明白なのではないでしょうか」
「おや。おまえは自らが魔女であると認めるのか。町中を素っ裸で引き回され、人々に誹

られ石打たれた挙げ句に、炎に焼き尽くされたいと望むのか？」
「あああ、そんな……」
　そうでした。それはリンチではなく、神様の御名の下に行なわれる正義なのです。そして私は、復活の日にも甦ることはなく、インフェルノの業火で永遠に焼き続けられるのです。
　神様が「誤審」をなさるとは思えません。ならば……ほんとうに私は、すでに淫魔に憑りつかれているのでしょうか？
「安心なさい。この疣は、善良で清純な乙女にさえ生えている場合もあります」
　そのお言葉だけで、業火が地平線の彼方まで遠ざかりました。
　見せてあげなさいと声を掛けられて、奥様がズボンをずり下げました。たぶん下着も一緒だったのでしょう。いきなり下半身が露わになりました。もっと驚いたことには、脱毛症のようです。
　奥様はラビアに指を当ててV字形に開くと、父様の前に立って腰を突き出しました。
「彼女にも淫魔のペニスが生えているのが見えますね？」
　父様が腰を屈めて覗き込みます。
「ううむ……たしかに」
　奥様はそうやって、立会人の皆様にも見せて回りました。
「ただし……」
　教区長様が、私の淫魔のペニスをくにゅくにゅとくじります。
「ひゃうんっ……」
　莢を剥いたり戻したり。中身の先っぽをくすぐったり。
　立て続けに電気が奔って、硬くしこっていくのが自分で分かります。
「このように、あたかも男性のペニスの如く勃起するのは淫魔の悪行です。この娘がすでに憑りつかれているのか、まだ救えるのか、慎重に判断しなければなりません」
　私ひとりを除いて皆が納得したところで、審問が再開されます。

淫魔のペニスをつままれて、きゅっと引き伸ばされます。上体をわずかでも曲げられないので、顎を引いても下腹部は見えません。かえって幸いです。

チクッと冷たい感覚に続いて鋭い痛みが貫きました。反射的に腰を引きました。梯子の踏み桟がお尻を押し戻します。

「きひいいっ……」

悲鳴が後から追い掛けてきます。でも、股間を鞭打たれたよりは痛くなかったです。

「おや。それほど痛くはなさそうですね」

教区長様も首を傾げます。

「ほんとうに、ここが契約の刻印かもしれません。もっと詳しく調べましょう」

また引き伸ばされて、今度はチクッが根元のほうへきました。

ぶつっ……と、針が肉に突き刺さる音を肌で聞きました。

「が゛ゃわ゛あ゛あ゛あ゛っっ……！！」

痛いと感じた瞬間に絶叫していました。

「ひいいいいい……」

悲鳴が止まりません。

針を引き抜かれて、ようやく止まりました。

「今度は芝居掛かっていますね」

教区長の助手のベルケン牧師様が、私が穿いていたドロワーズをずたずたに引き裂いて丸めました。それを私の口に押し付けます。

口をふさがれるというのも怖いですが、その詰め物が私のドロワーズだというのがすごく厭です。でも、牧師様に逆らうのはいけないことです。素直に口を開けて、声を封じていただきました。

「悲鳴に惑わされることなく、全身の反応を見て判断するのです」

教区長様はそうおっしゃって、淫魔のペニスの根元をつまみました。そして、針を真上から突き刺したのです！

「ま゛ゃわ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ……！！」

これまででいちばんの激痛が腰で爆発して脳天まで噴き上げました。

「も゛お゛お゛お゛、お゛お゛お゛お゛お゛……」

ずぐずぐと針が淫魔のペニスの奥深くまで肉を引き裂いて突き進むのが感じられます。腰がよじれますが、そうすると激痛がさらに跳ね上がるので……腰を突き上げた形で凍りつくしか出来ません。

針が引き抜かれても、激痛が居座っています。手首と足首もずきずきと痛むのに気づきました。木枷に逆らってもがいたのでしょう。

「ここには、悪魔の刻印は無いようですね」

ああ、良かった。神様、ありがとうございます。

しかし、感謝の祈りを捧げるのは早計でした。

「次は乳房です」

そうでした。罪深い女の身体には、悪魔に狙われやすい部分が幾つもあるのです。

「もしも淫魔がすでにこの娘に憑りついているとすれば、体内の奥深くへ逃げ込まないようにしておかなくてはなりません」

父様が名指しされました。

「この娘の乳房にこれを嵌めて、淫魔の逃げ道を断つのです」

これというのは、８の字を半割りにした鉄枷です。それが、乳房の上下にあてがわれて、両端をボルトで締め付けていきます。ぎりぎりと鉄枷が乳房に食い込んできます。

「むううう……」

すごく痛いのですが、淫魔のペニスに針を刺されることを思えば、ちょっと強く揉まれているくらいでしかないです。

乳房の根元をきつく縊られて、中ほどから先の部分が、針で刺せば破裂しそうなくらいに膨れました。

「淫魔が潜んでいると仮定して、じわじわと追い込んでいきましょう」

あなたたちも経験しなさいと――教区長様は三人の立会人と父様に針を持たせました。淫魔のペニスに使ったのより、ずっと太くて長い針です。

最初は父様です。昨日までは、いえ、この瞬間にも敬愛している父様に拷問される／違います／調べていただくのです。これは形を変えた祝福だと……思うようにします。

父様が左の乳房をわしづかみにして、ますますぱんぱんに張り詰めさせます。鉄枷で縊られているすれすれのところに針が突き立てられました。

「んゞむゞうううう……！」

三十分前の私だったら、口をふさがれていなかったら、喉から血を吐くほどに絶叫していたでしょう。でも、淫魔のペニスへの針刺しを体験してしまっては、颶風（ハリケーン）に対する強風（ゲイル）でしかありません。ですが、乳房の中をぐずぐずと針が突き進んでいく感触は、蜈蚣に食い荒らされるみたいな気色悪さです。

ぷつっと、針が乳房を突き抜けました。針を残したまま、父様が引き下がりました。

父様と反対の側に町長のディーラーさんが立ちました。右の乳房を、父様の倍以上の力で握り潰します。そして、三倍くらいの勢いで、一気に乳房を貫きました。

「もゞおゞおゞおおおっ……！」

二人を比べれば、やはり父様の刺し方には、娘へのいたわりがあふれています。

三人目は銀行頭取のギャレットさんです。先の二人とは違って、左の乳房を上から下へ縦に刺し通しました。

最後が保安官のハーベイさんです。父様よりも若い三十二歳です。いえ、意味はありません。修道女に準じた生涯を送ると決めているのですから、どんなに若くても恋愛対象にはなりません。ボブさんは家族に次ぐ親密さですから……こんなときに、なにを浮ついたことを考えているのでしょう。でも、若い男性（といっても、私の倍以上ですし、父様と三つしか違いません）に乳房をつかまれるのは、四十や五十の男性にそうされるのとでは、感じ方が違います。

などと、あれこれ考えてしまうのは。ハーベイさんが乳房をつかんだきり、固まってい

るからです。
「どうしても、やらなきゃ駄目ですかね？」
　やってください。どんなに痛くてつらくても、淫魔を追い祓うためです。
「この娘が魔女だとしたら、町にとんでもない災厄をもたらします。治安を預かる者の義務でもあるのですよ」
　教区長様に優しく強く諭されて、ハーベイさんも覚悟を決めたようです。
「む゛う゛うう、うううう、う゛う゛うう……」
　ためらいながらゆっくり突き刺すので、四人のうちではいちばん痛かったです。
「よろしい。私がとどめを刺しましょう」
　教区長様が、それまでのよりは短い針を持って、私の横に立ちました。淫魔のペニスへの仕打ちから、その針がどんなふうに刺されるか予測できてしまって、口の中の布を強く噛み締めました。
　それでも、淫魔のペニスに垂直に突き立てられるよりは痛くないでしょう。せいぜいが嵐（ストーム）くらいではないかしら。それよりも、左の乳首を正面から突き刺されたら、心臓に達するのではないかしら。そちらが心配でした。
　同じような描写の繰り返しになりますから端折りますけれど。嵐は二回襲ってきて、そのたびに絶叫は詰め物に吸い込まれました。乳房が爆発したと錯覚するまでの激痛ではありませんでした。
　今度こそ終わった。魔女の嫌疑は晴れたと喜んだのですが。教区長様はとても慎重なお方でした。
「狡猾な淫魔は、目の届きにくい部分に印を刻むものです。フェビアンヌ。この娘の腋と股間の縮れ毛を剃り落としてやりなさい」
「……」
　私は、ただ諦めるだけでした。
　毛を剃られてしまうなんて、とても羞ずかしいことです。でも、女性器の中まで晒して

いるのですから、それよりも羞ずかしいなんてことはありません。それに、剃られた毛はじきに元に戻ります。とにかく。徹底して魔女の嫌疑を晴らしていただくことだけを願います。

父様は髭を蓄えてらっしゃいますが、もちろんお手入れは（髭の無い人よりも入念に）必要です。父様の泡立て皿と剃刀が用意されました。いつもは父様の顔に泡を塗っている刷毛で私の股間を撫でられると考えると、股間にリンパ液がにじみ出てきます。それとも、淫らな汁なのでしょうか。

まず股間が真っ白に塗りつぶされて、剃刀が当てられました。

ぞりっ、ぞりっ……縮れ毛が剃られていくかすかな感触が肌を震わせます。くすぐったくて気持ちいいです。こんな楽しみが毎朝あるなんて、男の人って得だな。そんなことまで考えてしまいました。

立会人の皆様も、私と同じように手持無沙汰なのでしょう。私が剃られていくのを見物しながら、とりとめのない雑談をしています。

「あらかた剃ってしまったな」

「恥毛を剃ってしまうと、ますます幼く見えるな。さすがに良心がとがめるぞ」

「いや。使えるなら、女は若ければ若いほどよろしい」

耳をふさぎたくなりますが、それも出来ません。

「剃り残しが無いようにしなさい。ああ、アヌスのまわりは後回しです」

教区長様が、あからさまな指示をなさいます。

「これからはメコマックシティまで遠征せずにすみますな」

「ストーンのやつ、石っころだけあって融通が利かん」

「ティムの餓鬼なんか、ケツ穴に突っ込みかけただけで出入禁止を食らったからな」

「俺は宣教師スタイルだけで満足ですぜ。女の顔が見えなきゃ、つまらんでしょうが」

意味が分かりませんが、ストーンさんというのはサロンの経営者です。ケツ穴がどうこうというのは、私が得た最新の知見に照らせば、ソドムの罪を……町長様ともあろうお方

が、そんなことを望んでらっしゃるなんて、信じられません。私の聞き違いです。
「ホステスを鞭打ったりしたら、その場で撃ち殺されかねん」
「トリリアム亭ならグリーンバックで出来ないことはないが……」
「横領で縛り首はごめんだな」
「これからは、わずかな額を寄進すれば良いのだ。ノートン氏にもヒュンケル氏にも感謝せねばな」
「ホステスが若すぎるビッチ一匹では、ちと物足りんが……」
「いや、あの乳はじゅうぶんに鞣し甲斐がある。若いのだから、わしらの好みに調教できるというものだ」
　私としても、彼らの冗談話を本気で解読するつもりはありません。それでも聞き耳を立てているうちに、腋毛まで一本残さずつるつるに剃り上げられてしまいました。
　そして、今度はピンポイントではなく雨が平野に降り注ぐように、下腹部と腋を何十本もの針で突き刺されたのです。時間は掛かりましたけれど、淫魔のペニスや乳首に比べたら微風（ブリーズ）でしかありませんでした。
「それでは、最後の一か所を調べるとしましょう」
　教区長様のお言葉を、今の私は理解できます。
　私を引き伸ばしていた鎖がわずかに緩められたした。父様とベルケン牧師様とが手足の木枷を持ち上げて、私を俯せにしました。改めて鎖が巻き縮められます。
　お尻の肉に熊手のような道具が食らいついて、左右に引っ張られます。そこにひんやりとした空気が触れて、アヌスを剥き出しにされたのが分かりました。
　フェビアンヌさんがお尻を覗き込んで――そこの産毛（縮れ毛なんか生えていません）を剃りました。
　フェビアンヌさんが下がると、六人の男性が私のお尻を取り囲みました。皆さん、長い針を一本ずつ持っています。
「では、私から」

教区長様の声と同時に――ぷつっと針がアヌスに突き刺されました。
「む゛も゛お゛お゛お゛お゛っ……！」
ラビアに刺されるより、よほど厳しい激痛でした。
ぷつっ、ぷつっ、ぷつっ……続けざまに突き刺されて、そのたびに私はくぐもった悲鳴を上げさせられました。
「ふむ。ここにも印は刻まれていないようです」
そのお言葉を聞きながら、ふっと疑問が生じました。
乳房を調べるときは、淫魔が奥深くへ逃げ込まないようにと、鉄枷で縛られました。でも、ラビアやアヌスを調べるときにはそんな処置は取れません。それでかまわないのでしょうか。でも、教区長様に尋ねる勇気はありません。淫魔の逃げ道を封じるために、どんな恐ろしい処置を追加されるか分かりませんから。
木枷を外す前に、フェビアンヌさんが救急箱を持ってきて、傷の手当てをしてくれました。アルコール消毒をしてヨードチンキを塗るというより針で開けられた穴に擦り込むという、乱暴な手当てです。ヨードチンキは、すごく沁みます。針で刺されるよりは痛くありませんが、痛みが何分も続くし、乳房も女性器もアヌスも同時に痛いので、とろ火で焼かれるようなつらさでした。
これで、私の魔女嫌疑は晴れたと安堵したのですが。
「念には念を入れて調べましょう。せっかく、その用意もしてあることですし」
まさか、ここにある恐ろしい拷問毒具をすべて私に使うおつもりなのでしょうか。「準備をし過ぎるということは無い」という格言はありますが、「それをすべて活用しろ」とは言いません。
それでも、私は抗議できません。魔女審問を拒否すれば、それが魔女である何よりの証拠にされます。
「魔女は自然に逆らった存在です。水に沈めようとしても、水に拒まれるのです」
あの大きな桶に水を張って、私を沈めて確かめるのだとおっしゃいます。でも。水に沈

んでしまえば、魔女でないという証しを立てられるのでしょうが、溺れ死にます。

父様も加わっているのです。ぎりぎりのところで引き上げてもらえますよね？

水に浸けるといっても、大桶は空です。直径二フィート半、深さ三フィートもの桶に水を満たすには何時間も掛かります。せめて、その間は休ませてもらえる――なんていうのは、甘い考えでした。裏の井戸から水を汲んでくるのは、私ひとりの仕事にされてしまいました。

「みずからの潔白を証明するための仕事です」

元気なときでも、気が遠くなるような重労働です。それを、急所ばかり何十本もの針を突き立てられた満身創痍の肉体でやり遂げなければならないのです。

全裸のままで働くようにと、教区長様はおっしゃいます。それどころか。

「礼拝堂から外へ出れば、それだけ淫魔の付け込む隙も増えるのではないでしょうか」

教区長様から教えていただいた魔封じを施しておきましょうと、父様が提案しました。日曜礼拝のときのあれは、やはり父様がご自分で考えたものではなかったのです。

乳首を針金の輪で締め付けて乳房もぐるぐる巻きにして、針金の束で股間を封印したうえで、淫魔のペニスからは十字架を吊り下げる。ただ歩くだけでも、自分で自分を痛めつけるに等しいというのに、その姿で水を汲んで運ぶのは――ほとんど不可能事です。けれど、教区長様は大きく頷かれたのです。

「おお、そうでしたね。あなたの娘さんを案じる気持ちは良く分かります」

私も、父様と教区長様に感謝しないといけないのでしょうが……どうしても、その気にはなれませんでした。それなのに、厳重に身体を締め付けられ突起を虐められると……頭に靄が掛かって、腰の奥が熱く潤ってしまうのです。

何も知らない信者の皆様に見られる懸念が無いのですし、全裸でお淑やかもあったものではありませんけれど、がに股にならないよう気を付けて、胸を張って仕事をしました。だって、そのほうが刺激が強くて……なんでもないです。

二ガロンのバケツを同時に二つ持って、裏庭と礼拝堂を何十回と往復しました。十字架

を膝で蹴りながら歩きました。最初のうちは痛いのがずっと強いのですが、その中でかすかな快感がだんだんと蓄積していきます。水を汲んでいる間は股間の揺れが止まっていますが、腋を締めてポンプのレバーを動かすと乳房がこねくられて、やはり一定した苦痛の中に快感が蓄積していきます。

十往復くらいまでは回数を覚えていましたが、あとは霞の中を雲を踏みながら歩いているみたいになって――皆様が晩ご飯をとっている間も、私は働き詰めでした。お昼も食べていないのに、ちっとも空腹は感じませんでした。というか、淫魔に憑りつかれようとしている罪深い娘には、人並みに食事をすることなど許されていない。そんなふうにも思うのです。

水は大桶一杯に満たすのではなく、六インチ手前で止めるように言われていました。それでも、二十往復以上です。自分自身を拷問に／ではないです！／魔女審問に掛けていただくための準備が調ったときには、精根尽き果てて床に伏してしまいました。俯せになって自分の体重で乳房をこねくり乳首を虐め、十字架を太腿で押さえて腰をくねらせて……桃色の霞が薄れないようにしていました。これは魔女審問のための準備なのですから、淫魔の囁きにそそのかされた自涜行為ではありません。神様に祝福していただいているのです。なにかとんでもない考え違いをしているのかなとも思いましたけれど、三匹の鶏と二匹の牛で脚が何本あるかさえ計算できない状態ですから、そんな神学上の問題を考えられるわけがありません。

わずか数十分でしたが――ある意味で、これまでの生涯の中でいちばん幸せな時間を過ごしていたのではないでしょうか。苦痛と快感とがせめぎ合って、互いが互いを押し上げていくような恍惚。それが、決して淫魔にそそのかされたものではなく、神様に与えていただいているという、心の充足。

その一方で。なにかがひどく間違っているという予感もありました。

もしや、私ではなく……教区長様や父様こそが悪魔に魅入られて、私を生贄に捧げようとしているのではないだろうかという疑問。もちろん、私よりもずっと神様のおそばに居

る人たちが悪魔の手先であるなんて、馬鹿げた妄想です。そんな疑いを持つことこそ、私が淫魔に憑りつかれよとしている証拠ではないでしょうか。

「床に身体を擦りつけてオナニーとは、淫魔に支配された魔女の嫌疑がますます深まったな」

教区長様の声で、私は我に還りました。

「しかし、そうではない可能性もあります。どうか、娘のためにも厳正に取り調べてください」

「言われるまでもありません。我が教区に魔女が現われるなど、あってはならないことです。この娘が魔女でないことを皆で祈りましょう。アーメン」

起き上がって床にへたり込んでいる私に向かって、教区長様が十字を切ってくださいました。そして父様の手で、天井の滑車から垂れている太い鎖が、揃えた両足に巻き付けられました。

そのまま立たされて。短い鎖でつながれた手錠が股間に通されました。右手を前で拘束され、左手は後ろです。手を動かせば、鎖がクレバスに食い込んで——ごつごつした快感を強いられます。

立会人の皆様が、鎖の端を引っ張ります。そのままだと転んでしまうので、自発的に床に仰臥しました。脚が吊り上げられ、腰が持ち上がって——身体が宙に浮きました。水を張った大桶の真上です。

じわじわと吊り下げられていきます。ほつれたお下げが水に浸かり、目も水面下に沈もうとしています。そんなことをしても、せいぜい一分かそこらの違いでしょうが、急いで深呼吸をして肺に空気を溜めます。

すうっと顔が水に没して、肩から乳房……股間に水の冷たさを感じた直後に、頭が底に着きました。そこでは止まらずに鎖が緩められていって、脚が手前へ折れて桶の縁に掛かりました。それを、誰かが押し戻して——鎖の重みに負けてつま先が沈んでいきます。二つに折り畳まれた姿勢で、私の身体は完全に水没しました。

苦しい。顔が上下逆さになっているせいでしょう。息をしていなくても、鼻の中に水が入ってきます。くしゃみが出そうになるので、わずかずつ息を吐いて水抜きをします。

まさか、最初に懸念したように、水から浮かび上がって魔女の正体を現わすか溺れ死んで潔白を証すかの二者択一ではないでしょうね。

そんなはずは絶対にありません。教区長様にはそこまでの信頼を置けませんけれど、父様が娘を見殺しにする、どころか積極的に危害を加えるなんて、絶対にあり得ません。

それでも……これまでと違って、直截に命の危険を感じます。恐怖で急速に息苦しくなりました。

引き上げてもらえるまで堪え抜く。それしか、私に出来ることはありません。せいぜい、あと三十秒で引き上げてもらえるでしょう。

一、二、三、四、五……

……二十八、二十九、三十！

まだ気配もありません。あと三十秒……も、息が続きそうにないです。それでも、引き上げてもらえると信じます。

……もう、駄目。

苦し紛れに息を吐きました。ぼごごっと音を立てて、大きな泡が沈んでいきます。間違えました。頭が下になっています。泡は水面へ向かって浮かび上がっています。

息を吐き出せば、どうしても吸いたくなります。それを渾身の気力で我慢します。水が肺へ入ってしまえば溺れ死にます。

痛い……？！

断末魔の痙攣でしょうか。身体が海老のように跳ねて、桶にぶつかったのです。

お願いです、神様。こんなのは厭です！

身体の芯まで苦しいだけで、救いとなる快感がひと欠けらもありません。ああ、こんなことを考えるのも、私の身体に淫魔が巣食っているせいなのでしょうか。

身体の下のほうできらきら光っている水面が、すうっと暗くなっていきます。頭に霞が

――真っ黒な霞が掛かっていきます。

神様の下に召されるのでしょうか。もしも、神様にまで魔女だと断罪されたら……

がくんと、脚に衝撃が加わりました。誰かの手が、いえ複数の手が、私の身体を押したり脚を伸ばしたりしています。ぐうっと脚が引っ張られて。

「ぶはあっ……げふっ……！」

一気に空中へ引き上げられて、私は咳き込みながら空気を貪りました。冷たくて甘い空気。全身に酸素が沁み通る感覚が、快感を超越して生きている実感です。

※続きは製品版でお愉しみください。

原　案：ＷＩＬＬ
著　者：濠門長恭
表紙絵：藤間慎三
発　行：ＳＭＸ工房
ブログ：https://goumonchoukyou.jp/